

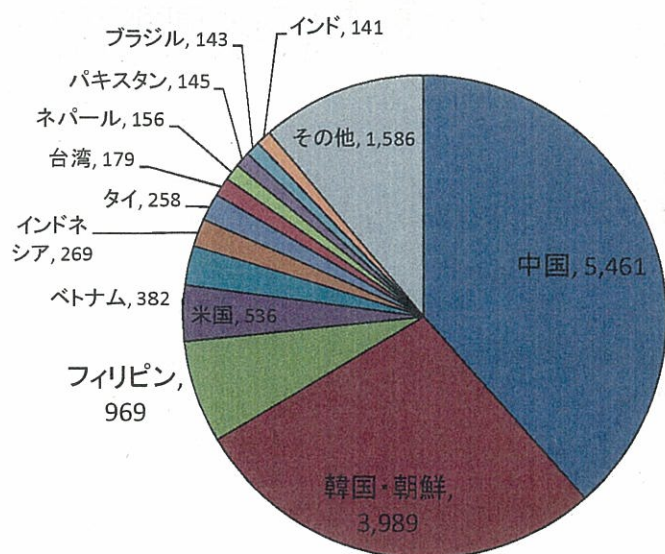


公益財団法人宮城県国際化協会の 取り組みについて ～宮城県の現状～

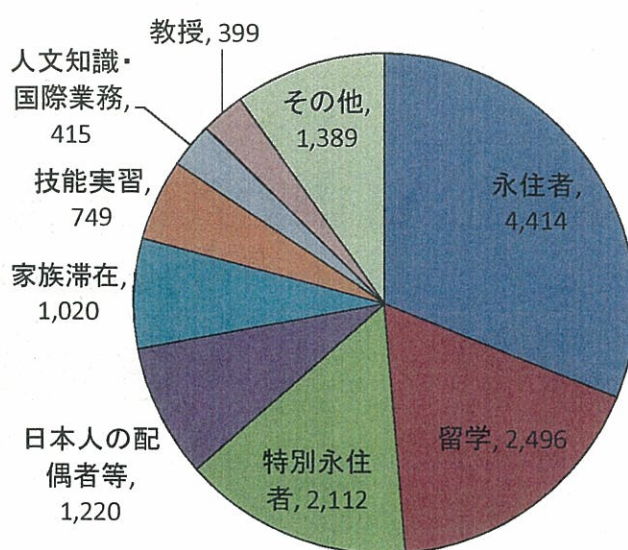
公益財団法人宮城県国際化協会（MIA）
企画事業課 大泉貴広

1. 宮城県の外国人の状況

(1) 国籍・地域別在留外国人数



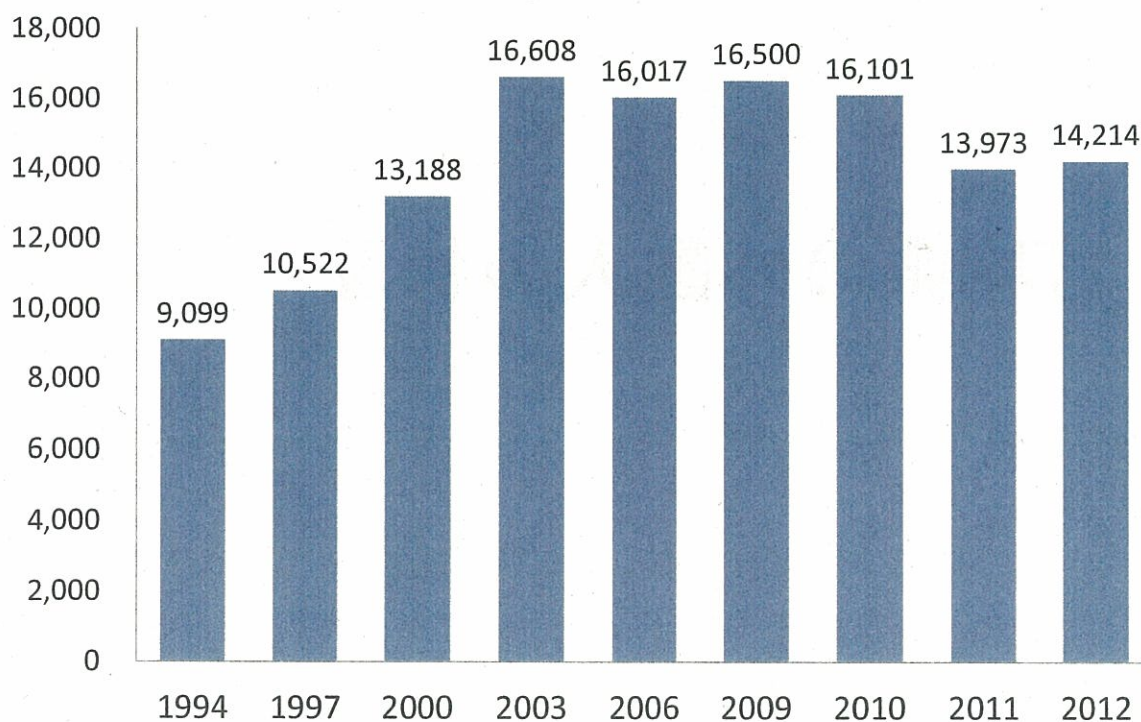
(2) 在留資格別在留外国人数



14,214人
県人口の約0.61%

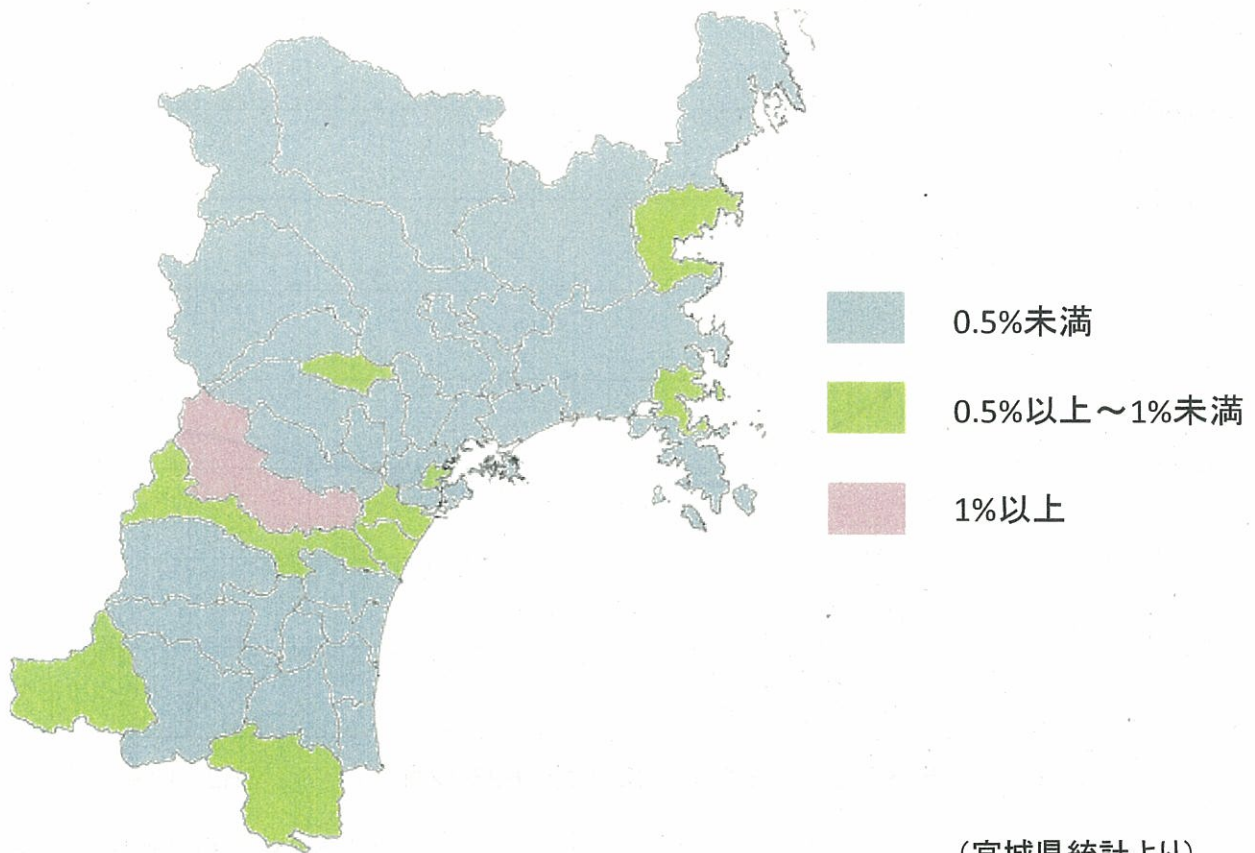
(2012年末現在/法務省在留外国人統計より)

(3) 在留外国人数の推移



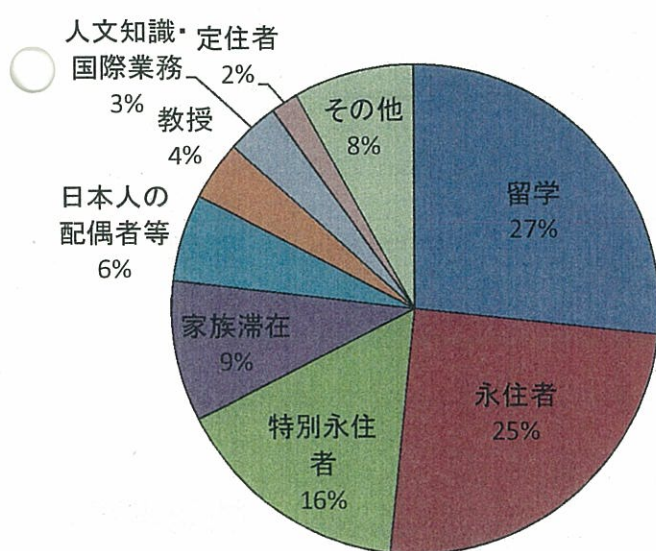
(法務省在留外国人統計より)

(4)在留外国人の人口に占める割合(市町村別)

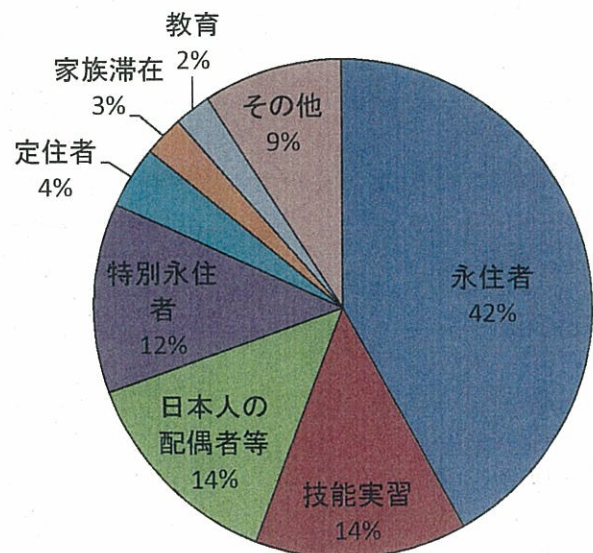


(宮城県統計より)

(5)仙台市・仙台市以外在留資格別内訳



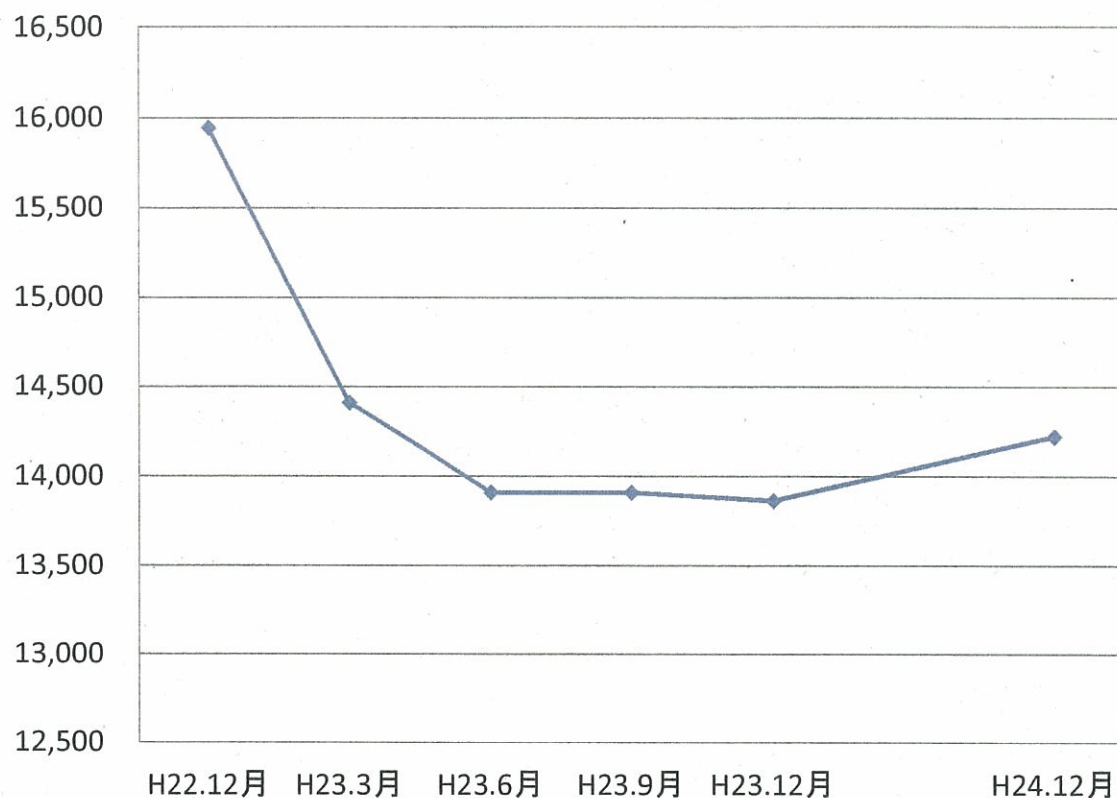
仙台市
(9,071人)



仙台以外の市町村
(4,877人)

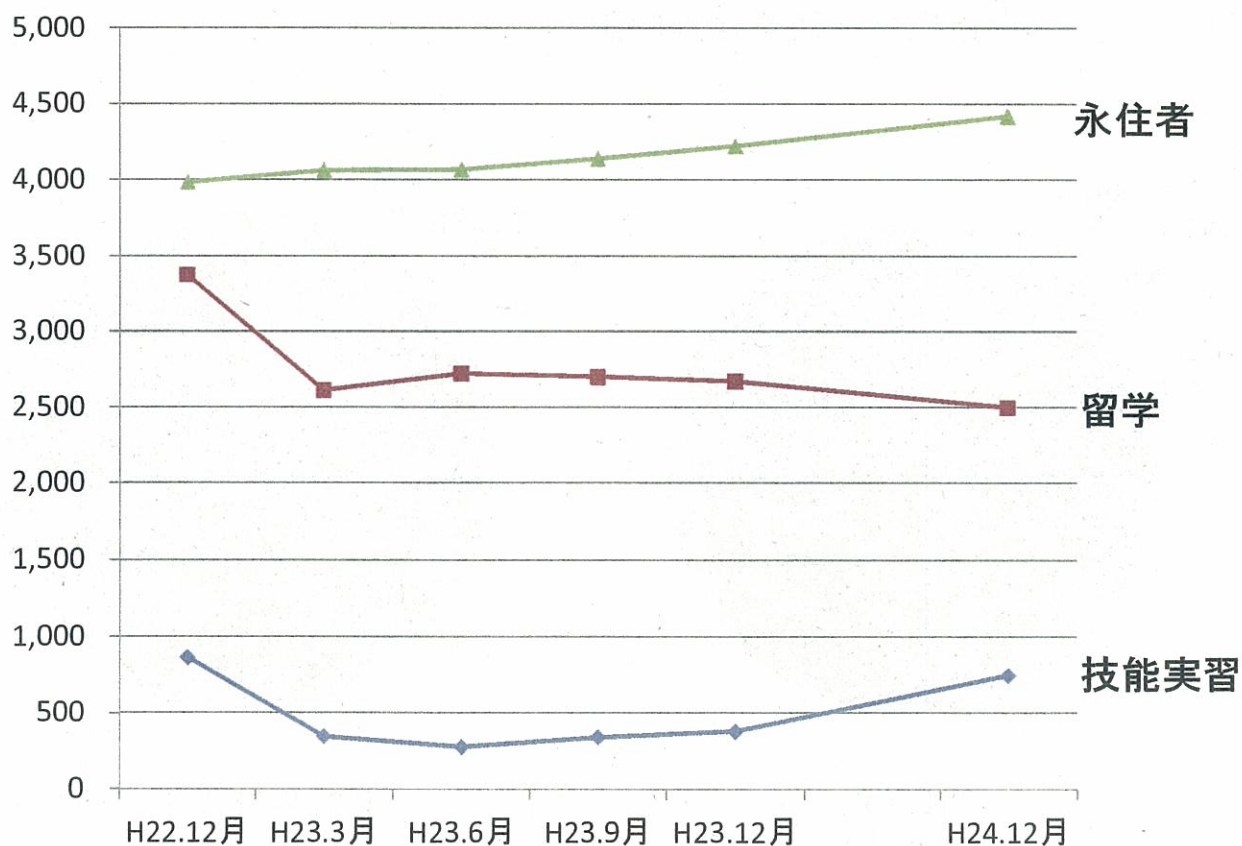
(宮城県統計より)

(6) 東日本大震災直後の在留外国人数の変化(総数)



※法務省発表の「速報値」を使用。
各月末現在

(7) 東日本大震災直後の在留外国人数の変化(在留資格別)

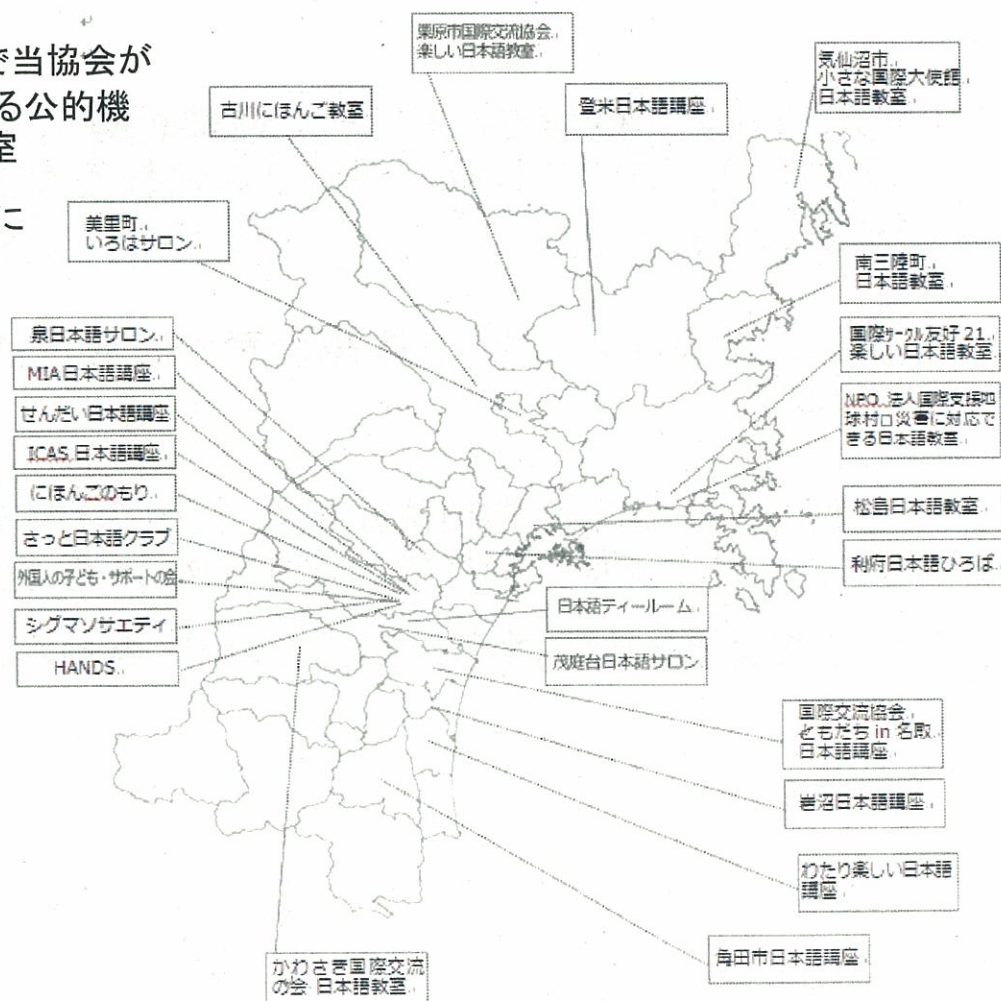


※法務省発表の「速報値」を使用。
各月末現在

2. 宮城県内の地域日本語教育の取り組み

・2012年12月1日現在で当協会が活動概要を把握している公的機関・市民団体による教室

・それぞれの活動概要については別紙①参照



3. 宮城県における地域日本語教育の特徴と課題

【論点1】

【論点4】

【論点7】

(1) 日本語教室が開設されていない地域があり、学ぶ機会が限られている。(35市町村のうち、日本語教室が開設されているのは15市町)

・外国人が少ないため、日本語教育が社会的課題として認識されにくい。

↓

・行政のなかでの優先順位が低く、行政の取り組みとして、または、行政の支援を受けての安定的な教室運営が困難。

・関心のある一部のボランティアの手に委ねられている。

(2) 学習者は日本人の配偶者(結婚移住女性)が多い。

- ・仲介業者による結婚や、日本在住の知人の紹介による結婚で来日した女性が多い。
- ・母国での日本語学習経験のない人が多い。
- ・夫や家族が妻の母語を理解していないケースが多く、来日直後から日本語のみの環境での生活となる。
- ・地域住民としての「永住」を前提としており、日本語習得の必要性が高い。
- ・近年の結婚移住女性の減少により、日本語教室の学習者数も減少傾向にある。

(3) 日本語教室が、学習者にとって家族以外の社会とのつながりを得る貴重な場となっている。

- ・同じ地域に暮らす日本人や同国人との出会いの場
- ・さまざまな情報を得る場
- ・社会参画のきっかけを得る場



言葉を学び、情報を得て、さまざまなネットワークを構築し、その地域で自立した生活を営むための「基礎体力」を養う場

(4) 公共交通機関が限られているため、教室に通うのが困難な地域が多い。

- ・送迎ボランティアのグループと連携している教室や、夫による送迎が可能な夜間に開講している教室も。
- ・移動手段がない場合、学ぶ機会が得られず、また、社会から孤立してしまう可能性もある。

(5) 継続的に活動する支援者が不足している教室が多い。

- ・支援者は中高年女性が多く、次の世代に世代交代が出来ずにいる教室が多い。

Ⅱ
ボランティア活動より
「働くこと」を希望

(6) 支援者と学習者の距離が近くなりがち。

- ・ときとして学習者にとって「姑」「舅」のような存在になる支援者。

◎メリット

「学習者」・「支援者」の関係を越え、地域の「先輩」としてさまざまな助言・支援をしてもらえる。

◎デメリット

支援者が、学習者とその家族とのトラブル等の対応に追われるケースも。

→ 多言語相談対応機関(国際交流協会)や地元行政の各窓口との連携が必要。

(7) カリキュラム案等の普及はこれから。

- ・市販の教科書を使用しているところが殆どであり、「カリキュラム案」等を活用しているところは1か所ではないか。

- ・まだその存在や活用法についての理解が進んでいないと思われる。

4. 宮城県国際化協会の地域日本語教育推進の取り組み

【論点2】

【論点6】

(1) 新規講座立ち上げ支援

① ボランティア養成講座(別紙②参照)

日本語教室未設置の地域や支援者不足の地域で養成講座を実施。

連携: 市町村

② 教材整備支援

新しく開設された日本語教室に、教材等整備のための支援金を交付。



南三陸町での日本語ボランティア養成講座

(2) 支援者のブラッシュアップ・ネットワーク促進の場の提供

① セミナー・連絡会議（別紙③、④参照）

支援者のブラッシュアップ、各教室のキーパーソン間、支援者間の連携促進を目的としたセミナーや連絡会議を実施。

連携：大学、国際交流協会、子ども支援NPO



日本語学習支援ネットワーク会議（共催事業）



日本語ボランティアセミナー

② 市町村日本語教室アドバイザー派遣

日本語教育やその関連分野に関する知識と経験の豊富な人材（アドバイザー）を県内の日本語教室に派遣し、各教室で抱える課題解決の一助としてもらうことを目的として実施。

◎アドバイザー：当協会日本語講座講師、大学教員、申請取次行政書士、

◎内容：「おしゃべり」型活動の紹介

- ・漢字の教え方についてのワークショップ
- ・活動を見学しての助言
- ・在留資格の基礎知識についての講義
- ・支援者との質疑応答・懇談 等

◎利用団体の声

ボランティアの都合（日時や内容）に合わせてやってもらえるのが良い。

（アドバイザーの）アドバイスが、私達が不安に思っていたことや疑問に思っていたこととピッタリと合い、問題解決が出来た。



市町村日本語教室アドバイザー派遣事業

このような出前型の事業を実施して現場に出向いたり日本語教室主催のイベントに参加したりすることが、当協会と地域日本語教室の情報交換のよい機会となっている。



③「日本語サポーター」ビギナー研修会

マンツーマンで日本語学習支援を行う「MIA日本語サポーター」登録者を対象として、活動に関する基礎的な情報や知識を提供し、円滑なサポート活動に役立ててもらうことを目的として実施。



(3) 情報提供

① 出前型の生活情報講座

地域日本語教室の学習者等を対象として、新在留管理制度、防災の基礎知識等について学ぶ会（「ニューカマーのための生活適応支援プログラム」）を開催。

連携：市町村、行政書士等の専門家、NPO

② メーリングリスト

当協会からの情報提供と支援者間の情報交換を目的とした「日本語ボランティアメーリングリスト」を開設。

③ 紙媒体での多言語生活情報

隔月発行の多言語生活情報誌（「MIA多言語かわら版」）や、生活情報ガイドブックを日本語教室の学習者宛てに定期的に送付。

(4) 日本語教育以外の問題への対応

中国語、韓国語、英語、タガログ語、ポルトガル語で対応可能な「みやぎ外国人相談センター」を当協会内に設置し、学習者からの相談があった際の利用を呼び掛けている。



連携：県、弁護士会、行政書士会

(5) 地域日本語教育に関する普及啓発

地域日本語教育をテーマとしたシンポジウムを県と共催し、企画・運営に協力。

連携：県、市町村

(6) その他

① 当協会主催日本語教室におけるパイロット的な試み

- ・「おしゃべり型」の活動を実施し、その具体的な手法や利点を「アドバイザー派遣」等や見学会を通して日本語教室に伝えている。
- ・当協会日本語講座講師が中心となって作成した地域日本語教室向けの漢字教材を、実際に使用して検証するとともに「アドバイザー派遣」等を通して地域日本語教室に紹介。
(別紙⑤参照)

② 日本語教材等の整備と貸出

日本語指導用教科書や指導者用参考書等を整備し、支援者等に貸し出しを行っている。



MIA日本語講座「おしゃべりの時間」

《参考》
東日本大震災後の
当協会の日本語教室支援等

(1) 津波被災地を中心に県内を巡回し、被災外国人の状況把握と支援を行うとともに、多言語相談窓口等の情報を提供

(2) 日本語教室支援者等のキーパーソンと連携し、被災者の生活再建を個別に支援

(3) 被災者支援のための各種制度等について多言語で解説した情報誌を作成し、日本語教室に配布。



日本語教室関係者とともに被災した中国人から聴き取り(石巻市)



避難所で支援活動をしていた日本語教室関係者(名取市)

(4) 震災体験や不安を分かち合うための「外国人の立場から東日本大震災を振り返る会」を6箇所で開催(200名超参加)。

(5) 津波被災地の日本語教室支援者や行政担当者にヒアリングを行い、活動再開のための支援金を交付。

(6) 外部からの支援の申し出を津波被災地の日本語教室につなぐ。

沿岸津波被災地域の多くに日本語教室があったことが、当協会の被災外国人支援活動の大きな助けとなった。



「外国人の立場から東日本大震災を振り返る会」(名取市)



日本語教室関係者・行政担当者からのヒアリング(気仙沼市)

5. 宮城県国際化協会における 日本語教育の取り組み

【論点2】

【論点3】

【論点4】

【論点5】

【論点10】

(1)「MIA日本語講座」

定住外国人の生活適応支援の一環として4つのコースを開講

クラス	曜日	時間	期間・回数	テキスト	受講料	定員
初級1 初級2	火～金	10:00～ 12:00	4月26日～ 9月24日 (全60回)	「日本語初級1 大地」「日本語 初級2大地」	¥18,000	各20人
中級	火・木	13:00～ 15:00	4月16日～ 9月19日 (全30回)	「中級を学ぼう」	¥9,000	20人
漢字1 漢字2	金	13:00～ 15:00	4月19日～ 9月27日 (全18回)	講師作成教材	¥7,200	各20人
夜間初級1 夜間初級2	火	18:30～ 20:30	4月9日～ 10月1日 (全20回)	「日本語初級1 大地」「日本語 初級2大地」	¥12,000	各15人

※初級1、2、中級の学習者を対象に、月に一回程度ずつ「おしゃべりの時間」を設けている。

◎ 指導者について

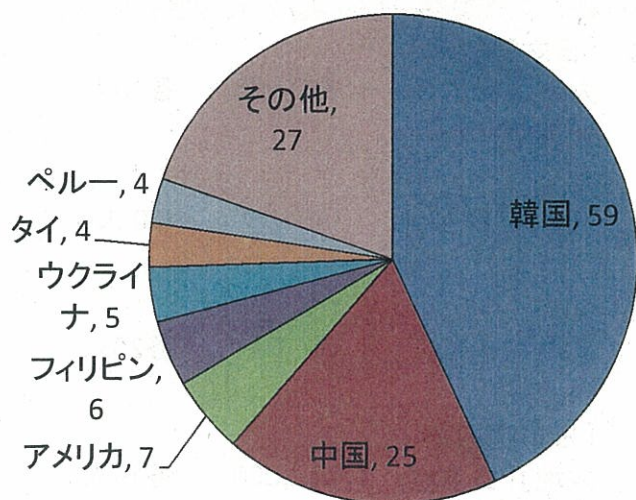
- ・当協会から委嘱した講師10名。
- ・日本語教育能力検定試験合格者または、420時間の日本語講師養成講座の修了者等で、クラス形式の教授経験を有する人。(現在の講師陣:他の地域日本語教室で活動していた方、日本語学校に勤務している方、大学の留学生センターで教えていた方など)
- ・「スーパーバイザー」がコースデザインや他講師への指導等を担当。
- ・新たに講師を募集する際には、教案と模擬授業を基に選考。



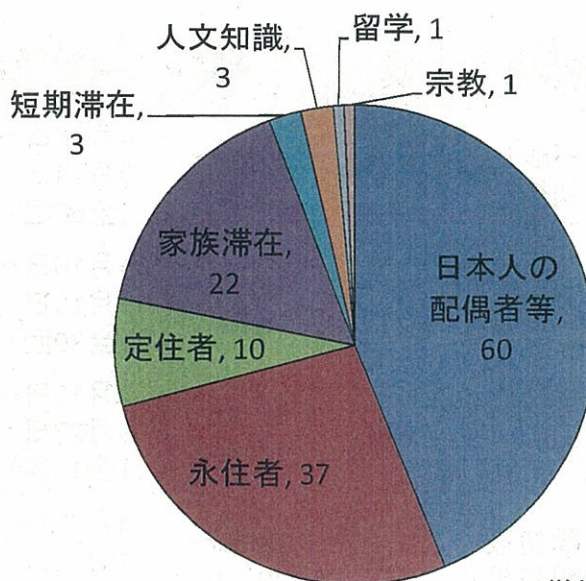
初級2クラス

◎ 学習者について

国籍別内訳



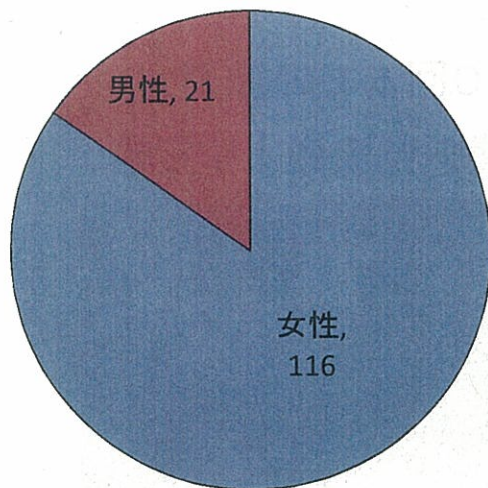
在留資格別内訳



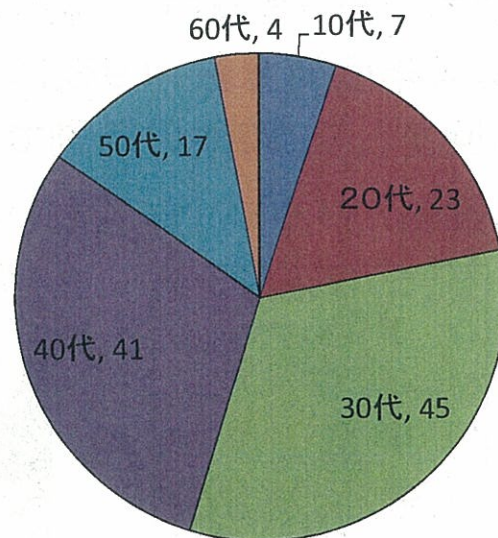
単位:人

※H24年度の初級1、初級2、中級、漢字1、漢字2の前期・後期受講学習者の合計。
夜間講座はALTが半分以上を占める。

男女別内訳



年代別内訳



※韓国・中国出身の、中高年日本人配偶者(結婚移住女性)が多い。

(2)「日本語サポーター」の登録と紹介

日本語教室も通うことのできない学習希望者に、マンツーマンで日本語学習のサポートをする「MIA日本語サポーター」を紹介。

- ・サポーター登録者数: 約130人
- ・県内在住の18歳以上の方なら誰でも登録可
- ・H24年度紹介数: 59件
- ・交通費・教材のコピー等に係る費用を学習者が負担

(3) 外国人児童生徒等への支援

①日本語学習・教科学習のサポート、通訳・翻訳等を行う「MIA外国籍の子どもサポーター」を小・中学校に派遣。

- ・サポーター登録者数: 約100人(うち6割が海外出身者)
- ・H24年度紹介数: 19校20人
- ・1回あたり2時間の活動で、合計40回までの派遣。
- ・1回あたり2,000円の謝礼＋交通費を当協会より支給。



「MIA外国籍の子どもサポーター」スキルアップ研修会

②進路ガイダンス開催への協力

- ・高校入試制度について解説するとともに、保護者からの個別相談に応じたり、子ども同士の意見交換をしたりする「日本語を母語としない親と子どもと親のための進路ガイダンス」を共催(主催:実行委員会)。

連携: 県教委、市町村教委、子ども支援NPO、外国人支援NPO、国際交流協会、大学等

- ・今年度は仙台市、石巻市、登米市の三か所で開催予定



石巻市での進路ガイダンス



進路ガイドブック(中国語版)

6. 東日本大震災と日本語教室

(1) 地域に暮らす外国人にとって「セーフティネット」となった日本語教室

- ・支援者による学習者(元学習者)の安否確認
- ・情報や支援物資の拠点
- ・精神的な支え合い
- ・支援者による学習者(元学習者)の生活再建のためのサポート



日本語教室関係者の案内で避難所を訪問

◎地域に暮らす人たちとのつながりを得る場としての日本語教室の役割の再確認

◎日本語教室と普段から連携を深めておくことの重要性の再確認

(2) 学習者(元学習者)や日本語教室の変化

① 日本語学習(特に漢字)に対する意識の変化

生活再建のため役所・役場等でさまざまな手続きをする必要に迫られた人や、就労支援講座の受講生たち等が、漢字を習得することの必要性を感じて日本語教室で学び直しをするケースが見られる。

② 仕事のために教室をやめる学習者

被災して経済的に苦しくなったため、パート・アルバイトをせざるを得ず、日本語教室での学習を中断してしまう学習者もいる。



震災後に場所を転々としたのち、漸くもとの場所で再開した日本語教室(岩沼市)

③ 「元」学習者による日本語教室立ち上げ・居場所作りの取り組み

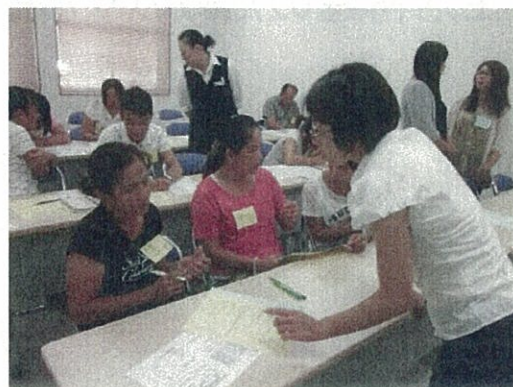
・生活再建のための日本語の重要性、母語で情報交換できる場所、集う場所としての日本語教室の必要性を再認識し、教室立ち上げのために動いた、津波被災地の台湾出身女性。



町、当協会との連携で教室が立ち上がり、配偶者や研修生が集い、学ぶ場所となっている。



震災直後、自ら被災するも同国人支援に尽力していたKさん



開設された教室で支援者の一人として活動するKさん



・避難所で生活するなか、海外出身の仲間たちの安否を気遣い、集う場所・ひと息つく場所が欲しいと考えて居場所作りに取り組んだ津波被災地の台湾出身女性



子ども支援NPOとの連携で「ハッピーママの会」というグループを立ち上げ、絵本の読み聞かせや、交流会等を企画し、海外出身女性同士、または地域に暮らす日本人女性との交流の場になっている。



自らの体験を発表するSさん。

④被災外国人支援を目的とした団体による新たな取り組み

・被災外国人の支援に入った難民支援協会と気仙沼市の日本語教室が連携し、「仕事」を必要としていた被災女性を対象として、ホームヘルパー2級の資格取得を目的とした「外国人就労支援プロジェクト」を実施。



資格取得のために必要な専門用語を指導



学習者24名のうち、12名が事業所に就職(H24.12月現在)

・外国人支援NPOやキリスト教関連団体が被災者支援の一環として新たに日本語教室を開設。



施設で働くフィリピン出身者

宮城県内日本語教室活動概要

※「日本語学習支援ネットワーク会議」(2012.12.8実施)の資料作成のために各団体から提出された団体情報から抜粋

No.	教室名	運営団体	開催場所	開催曜日・時間	学習者数	支援者数 (日本語)	課題となつてゐること・今後の展望
1	ICAS日本語講座	国際都市仙台を 支える市民の会 (NPO法人アイカ ス)	東北大学留学生会 館	初級:火~木曜日 10:00~11:30 中 級:木曜日 10:00 ~12:00	韓:6、中:2、その 他6		学習者が減少しており、講座としての収入も減つてゐるため、講座運 営のための費用の捻出が厳しくなつてきてゐる。NPO法人ICASの活 動に関心を示す人は多いので、さらに研修を深めて支援活動に励み たい。
2	せんだい日本語講座	NPO法人アイカス、青 葉区中央市民セン ター、仙台国際交流協 会	青葉区中央市民セン ター	火~金曜日 10:00~16:40	約100、約25か国	17	異文化交流事業を通してボランティア活動をする人の数が減つてきてゐるよう に思ふ。なかなか日本人が参加してくれない。震災後ボランティア行事参加の 意識が薄れてきてゐると思う。但し、公開研修会は盛況だったので、現在日本 語ボランティアをしている人たちの向学心は衰えてゐないと感じた。
3	ざっと日本語クラブ	NPO法人アイカス	青葉区中央市民セン ター	土曜日 10:00~12:00	韓:3、中:3、マ レーシア:2、その 他:3	3	外国籍の子どもで学校になじめない、学校の勉強についていけないなど、困つ ている子どもたちの大切な居場所になつてもらいたい。震災前の学習者(子ど も)数に戻つて活気ある教室にしたい。
4	日本語ティーラーム	日本語ティーラーム ボランティア	八木山市民センター	水・金曜日 10:00~11:30	中:26、韓:9、タイ: 2、ドイツ:2、その 他:6	19	震災後2学期開始時点で、開講式に集まつた受講者は3名、それから徐々に増 えてゐるが、震災前の数には戻つておらず、受講者募集については試行錯 誤の状態。受講者が少なくてもレベルに差があるためクラス分けをしなければ ならず、また支援者の平均年齢が上がり週2回の教室活動の参加が難しく、ま た新たにボランティア活動に加わり、更に定着してくれる支援者は少なく、結 果、教師ボランティアも常に不足してゐる。
5	にほんごのもり	にほんごのもり	仙台国際センター	火・木曜日 13:00~15:00	中:66、ベトナム:14、韓: 11、台:6、アメリカ:6、インド ネシア:4、タイ、フィリピン:各 3、その他19 ※1月~ 11月の登録者数	45	活動日が2倍に増えた分、経費が増えた。予約不要という教室のた め、毎回、学習者数とボランティア数のバランスが安定しない。HPや チラシなどを活用しPRに努め、改善を図りたい。
6	茂庭台日本語サロン	茂庭台日本語サ ロンボランティアグ ループ	茂庭台市民センター	水曜日 10:00~11:30	韓:3、イエメン:2、 その他:5	5	学習者が減少し、会の運営費も少なくなつた。施設使用料の支出が厳し い。ボランティアの高齢化等があり、後継者がいない。学習者が少なく なり、他のボランティアの活動がなくなる。
7	泉日本語サロン	日本語教師ボラン ティアの会	桂市民センター	金曜日 10:30~11:45	中:3、台:3、メキシ コ:3、その他:5	12	今後学習者の増加が見込まれるため、支援教師の増加が望まれる。 支援教師の増加があれば、夜間レッスンの再開も考慮する。
8	シグマソサエティ	東北福祉大学シ グマソサエティ	東北福祉大学内学 習ホール	土曜日 10:30~12:00	自由参加のため、 固定化した学習者 の数は出せない。	30	学生主体であるため行事や学校生活により支援者数が変動する。学 習者が減少してきてゐる。ただし、これには1人の学習者に多くの人 数を割くことができるというメリットもある。新しい日本語学習の指導 法を模索していきたい。
9	外国人の子ども・サ ポートの会	外国人の子ども・サ ポートの会	エル・ソラーラ仙台、エ ル・パーク仙台、児 童自宅、ほか	生徒とサポーター が相談して決める	中:11、フィリピン: 7、韓:4、インドネシア: 2、その他:2	37	高校進学をしなかつた生徒と、車の運転免許を取るための日本語学 習の形で学習を始めた。今年からの新しい試みで、来日して短期間で 高校進学した生徒には、模範の科目に対応するためにサポーターが チームを作ってサポートしてゐる。
10	MIA日本語講座	宮城県国際化協 会	別紙参照				
11	楽しい日本語教室	国際サークル友好 21	石巻中央公民館	月曜日 10:00~12:00	中:8、韓:6、タイ: 3、台湾、フィリピン、ベ トナム、インドネシア、ブラ ジル:各2、その他:2	20	経済的な理由と家庭の事情などから、日本語教室を休んだり退会する学習者 が多くなってきてゐる。震災前の状況に比べるのかどうか、予測がでないの が不安。日本語教室は、支援者の献身的な活動で成り立っているもの。 しかし、ガソリン代すら捻出できない貧乏なボランティア団体のために、いつも 必死に思つてゐる。
12	災害に対応できる日本 語教室	NPO法人国際支 援地球村	NPO法人国際支援 地球村	火・金曜日 10:00~12:00	韓:9、中:4、アメリ カ:4、ドイツ:1	3	日本語を学んで自信をつけた学習者は、働く場所を探すのがなかなか 見つからない状況。

13	気仙沼市小さな国際大使館	気仙沼市小さな国際大使館	市内の公民館	木曜日 13:30～15:30	中:5、フィリピン:5、アメリカ:1	12	新規受講生のスカウト、ボランティア育成、会場設備の充実。 外国人ネットワークを構築中
14	日本語講座	国際交流協会とも だちin名取	名取市市民活動支援センター	月曜日 10:00～12:00	中:6、タイ:4、インドネシア:3、韓:2、その他:3	12	活動拠点としている現センターは従前よりかなり狭小になったうえに、市内の他の団体の利用も増加してきたため、学習者増員の積極的なPRを控えなければならぬ。多文化共生部では、活動分野の質量両面の膨大化により支援者数の不足を来している。・活動拠点として可能な施設の早急な増加が望まれる。・市行政サイドとの密なる連携が不足している。
15	角田市日本語講座	角田市	角田市総合保健福祉センター	木曜日 10:00～12:00	フィリピン:5、中:4、タイ:3、韓:2、パキスタン:1	4	学習者を増やしていくこと。指導者の後継者を育成していくこと。
16	岩沼日本語講座	日本語講座いわぬまアイビー	岩沼市中央公民館	木曜日 10:00～12:00	中:8、韓:6、タイ:2、台:2、その他:3	4	スタッフが震災による家庭の事情で参加できなくなり講師の不足が出ている。小さな講座なので「講師の不足・クラスの減少」につながっており、学習者の希望に沿えないこともある。定期的なボランティア活動はなかなか受け入れられなく、スタッフの不足、高齢化が目立ってきている。国際情勢(竹島、尖閣等)を話題にする学習者もいて、対応に苦慮することもある。
17	登米日本語講座	登米市国際交流協会	登米市迫町公民館	金曜日 19:00～20:00	韓:5、中:2、フィリピン:3	4	母体となった国際交流協会の意識の改革
18	楽しい日本語教室	栗原市国際交流協会	栗原市市民活動支援センター	金曜日 18:30～21:30	中、アメリカ、カナダ、北アイルランド:各1	4	学習者は随時入退学のできるころになっており、レベルが違うのでやりにくい所がある。テキストとしては手作りのものが多く、時には新聞や層なども使用する。かつて学習していた児童が、こし中学校卒業大会(県)で優勝した。
19	古川にほんご教室	古川にほんご教室	大崎中央公民館	土曜日 13:00～15:00	韓:11、中:2、タイ:2、その他:3	5	ボランティアの人数が減り、みんなの日本語初級 I のクラスはなくなりました。ボランティアが増えることを願っています。
20	日本語教室	かわさき国際交流の会	川崎町公民館	火・金曜日 18:30～21:00	アメリカ:2	1	教室は12月中旬から3月一杯冬休みに入るが、参加者の人数が少くない。サロンの意味もあり、18:30～21:00と開講しているのので、気軽に顔を出してくれるよう話をしているが、来春以降の存続が危ぶまれている。
21	わたり楽しい日本語講座	わたり楽しい日本語講座スタツ	亘理町中央公民館	水曜日 10:00～12:00	中:4、フィリピン:4、タイ:3、韓:2、その他:2	5	介護ヘルパーの資格を取る事はあまり難しくはないのですが、面接試験がかなり難しいので、今後の課題です。楽しい行事を組み入れ参加しやすいものにしていきます。
22	松島日本語来教室	松島日本語教室	松島町中央公民館	木曜日 19:00～ 20:30、金曜日 12:00～16:30	中:9、韓:4、パキスタン:2	7	日本語教室まつりは本年度より再開する。松島日本語教育研究会は平成25年より再開する予定。教育ボランティアの養成及び勉強会を再開する予定。
23	利府日本語ひろば	利府町国際交流協会	利府町生涯学習センター	学習者の希望曜日に合わせている。 学習時間:2時間	中:6、アメリカ:2	20(登録) 11(活動)	地域的に学習希望者が少ない。従って希望者を選択する余地はない。学習者のほとんどが会社勤務者であり、学習者の要望曜日・時間がまちまちである。従って、開催曜日が複数となることになっていく(土・日に限定できない)。勤務体制が複雑で、休日が定まっていけない勤務者も多い。就職活動前の駆けつけ学習希望者が見られる。勤務先が決まると突然止めてしまう。来日早々の学習者対象の短期学習支援体制が必要である。講師登録者も勤務者が多く、限られた講師に負担がかかる場合も生じている。講師登録者の反応が希薄になっているように思われる。学習者の募集方法について、有効な手段がない。学習者の学習意欲を増すために、有料化検討の声も講師から上がっている。
24	いろはサロン	国際支援いろはサロン	美里町公民館	水曜日 10:00～12:00	韓:2、中:1、パキスタン:1	8	町外在住の外国出身者も受け入れられており、年間で2名程度の新規受講者があるが、いずれも定着せずに定期的に参加する受講者が増加しない。ボランティア講師の方が教室を運営しているが、新たに講師として参加していただける方が少ない。
25	南三陸町日本語教室	南三陸町国際交流協会	南三陸町役場	土曜日 19:00～21:00	中:15、フィリピン:3	6	様々なニーズに対応するため、講師の人数を増やしたい。意欲的な受講生が多く、日本語の習得だけではなく日本文化との関わりも強めていきたい(地域活動への積極的な参加や野外活動等)

日本語ボランティア 養成講座(南三陸編)

**参加者
募集!**

宮城県には、現在たくさんの外国出身の方が暮らしています。地域の日本語教室は、そうした方々が基礎的な日本語を身に付ける場、地域住民とのつながりを得る場となっているほか、東日本大震災の際には、安否確認や情報伝達の場として、外国人被災者の大きな支えとなっていました。

この講座は、そのような地域の日本語教室において、外国人と交流を深めながら日本語習得のお手伝いをする「日本語ボランティア」として活動を始めるための基礎的な知識や心構えなどを学んでいただくためのものです。ご興味のある方はどなたでもご参加いただけます

●第1回

2011年 **11月17日(木)** 13:30~16:30

- ・地域の国際化と日本語ボランティア活動
- ・私たちの使う日本語を見直す①
～外国語としての日本語～

●第2回

2011年 **11月24日(木)** 13:30~16:30

- ・学習者の気持ちになってみよう～外国語学習体験～
- ・地域における多文化共生の取り組み
- ・私たちの使う日本語を見直す②
～「やさしい日本語」に挑戦～

●第3回

2011年 **12月1日(木)** 13:30~16:30

- ・日本語学習支援の方法①
～日本語の教科書を見てみよう～

●第4回

2011年 **12月8日(木)** 13:30~16:30

- ・日本語学習支援の方法②
～いろいろな素材を使っておしゃべりしよう～

■会場

第1回、第2回：南三陸町ベイサイドアリーナ1階 和室
(南三陸町志津川字沼田 56)
第3回、第4回：南三陸町仮庁舎 会議棟
(南三陸町志津川字沼田 56)

■定員

20名(定員になり次第締め切ります)

■受講料

無料

■講師

日本語学習支援 EN-NET(えねっと) 鈴木英子さん 他

主催／財団法人宮城県国際交流協会(MIA)

共催／南三陸町国際交流協会

●お問合せ・お申込み

南三陸町国際交流協会事務局(南三陸町役場総務課)

TEL: 0226-46-1370 FAX: 0226-46-5348

(財)宮城県国際交流協会

TEL: 022-275-3796 FAX: 022-272-5063

メール: mail@mia-miyagi.jp

お申込みの際は、お名前・ご住所・電話番号をお知らせください。

※いただいた個人情報は、本講座の講座運営のためにのみ利用します。



M I 参加者募集!

日本語ボランティアセミナー

このセミナーは、日本語ボランティアの役割や、よりよい支援のあり方について考えること、また、参加者同士の意見交換・情報交換を通して相互の連携を図ることにより、ボランティア活動をより良いものとしていただくことを目的として開催するものです。現在日本語ボランティアとして活動中の方、ご関心のある方、是非ご参加ください。

日時 2013年 2月 24日(日) 午後1時～4時

場所 仙台市戦災復興記念館 4階第2会議室

裏面の会場案内をご覧ください》

対象 日本語ボランティアとして活動中の方、

または関心のある方

古 呂 八 木 (西 中 川)

参加費
無料

[プログラム]

●講義・ワークショップ

『「対話」を通じた日本語学習支援の理論と実際～地域日本語教室向けの教材を使って～』

講師 帝塚山大学准教授 森 篤嗣さん

地域の日本語教室向けに作られた『にほんごこれだけ1・2』の著者をお招きして、なぜ、対話（おしゃべり）型の活動が地域日本語教室ではおススメなのか、具体的にどうすればいいのか、についてお話しいただくとともに、ワークショップを行って、実際に活動するときのコツを学びます。文型や語彙を順番に「教える」のではなく、ことばの習得を「支援する」方法、そして、支援者の役割について、いっしょに考えてみませんか。

●懇談会

お茶とお菓子を囲んで、他のボランティアの方々との情報交換、ネットワークづくりをしませんか。

お申込み・お問合せ

(公財) 宮城県国際化協会 (MIA)

TEL: 022 (275) 3796 FAX: 022 (272) 5063

メール: mail@mia-miyagi.jp

- ・お名前・ご住所・電話番号・メールアドレス、所属団体をお知らせください。
- ・FAXでお申込みの際は、裏面の申込書をご利用ください。
- ・いただいた個人情報、この事業実施のためにのみ活用します。



日本語学習支援ネットワーク会議 2012 in 仙台

— ポスト 3.11 の沿岸被災地の日本語教室の新たな動きとこれからの協働 —

■日時：2012 年 12 月 8 日（土） 10：00 - 16：30

■場所：東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）601 会議室、603 会議室

【午前 10:00~12:00】

◆開会ご挨拶 市瀬智紀（実行委員長・宮城教育大学）

◆パネルセッション「ポスト 3.11 の沿岸被災地の日本語教室、これからの役割、つながりについて」

- ・村上伸子さん（気仙沼市震災復興・まちづくり推進課）
- ・清水孝夫さん（石巻市 国際サークル友好 21）
- ・杉山美恵さん（石巻市 国際サークル友好 21）
- ・佐藤金枝さん（南三陸町国際交流協会）

進行 大泉貴広（宮城県国際化協会）

（12:00~13:00 昼食休憩 ※601 が休憩室になります。ご自由にお使いください。）

【午後 1 13:00~13:50】

◆文化庁からの報告「『生活者としての外国人』のための日本語教育事業について」

文化庁文化庁国語課 山下隆史さん

【午後 2 14:00~16:30】

◆ラウンドテーブル（14:00~16:00）

「宮城県各地域の日本語教室の支援者・学習者とともに語りましょう」

・第 1 分科会＜601 前方＞

気仙沼市小さな国際大使館、栗原市国際交流協会、

泉日本語サロン日本語教師ボランティアの会（仙台市）、

NPO 法人国際都市仙台を支える市民の会（ICAS）、日本語講座いわぬまアイビー 進行：市瀬智紀

・第 2 分科会＜601 後方＞

登米市国際交流協会、国際サークル友好 21（石巻市）、

日本語ティールームボランティア（仙台市）、国際交流協会ともだち in 名取

わたり楽しい日本語講座

進行：菊池哲佳（仙台国際交流協会）

・第 3 分科会＜603＞

南三陸町国際交流協会、松島日本語教室、利府町国際交流協会、にほんごのもり（仙台市）、

茂庭台日本語サロンボランティアグループ（仙台市）、角田市日本語講座

進行：田所希衣子（外国人の子ども・サポートの会）

（16:00~16:10 休憩 ※机・椅子の移動にご協力ください。）

◆全体会＜601＞（16:10~16:25）

ラウンドテーブルからの報告とまとめ

◆閉会ご挨拶 田所希衣子

全体進行：松岡洋子（岩手大学）

主催：日本語学習支援ネットワーク会議 2012 in 仙台 実行委員会

共催：岩手大学国際交流センター（公財）宮城県国際化協会

宮城教育大学附属国際理解教育研究センター（財）仙台国際交流協会

後援：宮城県教育委員会 仙台市教育委員会

はじめに

本書は、公益財団法人宣城県国際化協会主催の MIA 日本語講座で使用する初級漢字教材として作成しました。コンセプトは「使って覚える漢字」です。一つひとつの漢字につけた例文は、すべて日常生活の会話場面でも使える表現です。学習した漢字語を例文とともに実際の会話の中で使いながら覚えることで、効率よく漢字の運用力をつけることができます。

地域日本語教室の漢字学習支援では、学習者のニーズに合わせて「生活漢字」や「基本漢字」などの教科書を選択していますが、結果としてどの教科書もそのままでは使いづらいという問題に直面することが多くあります。

「生活漢字」の教科書は、日常生活で出会う漢字に興味を持って学ぶことができますが、学習者自身の中に漢字を積み上げていくには時間がかかり過ぎて、支援者側にかかなりの工夫が必要となります。

一方、「基本漢字」の教科書は、初級漢字を効率的かつ体系的に学ぶことができますが、対象が留学生であるために、選択されている漢字語彙や例文が、地域の教室で学ぶ学習者には必要でないものも多くあります。そのため、支援者は学習者に合わせて取捨選択を行わなければならず、やはり工夫が必要です。

こうした現場の悩みから「学習者が漢字を身近に感じながら、楽しく基本漢字を学べるようなものがないだろうか」と模索し、試行錯誤を続けてきた結果、この形の教材が生まれました。

地域日本語教室の初級学習者の場合、まずは話せるようになることを優先して、漢字学習を後回しにする傾向にあります。しかし、長期的に日本で暮らしていると、仕事や子どもの教育などにおいて、漢字は避けては通れない壁となつて学習者の前に立ちふさがります。そのため、日常会話には不自由のない学習者からも漢字を学びたいという声を多く聞きます。こうしたことを踏まえ、例文には初級語彙だけでなく、中級話者も関心を寄って学べるような中級レベルの語彙も入れました。これにより、生活の中で聞き慣れた言葉と漢字語が結びついて、漢字に親しみながら学習していくことができます。

また、練習問題も多様な形式の問題を提示し、達成感を持って学べるよう工夫しています。本書をお使いいただくことにより、漢字学習の時間が楽しいものになれば幸いです。まだ試作版ですので、皆様のご意見やご感想などをお聞かせいただきたきながら、引き続き改良してまいりたいと思っております。ご指導をよろしくお願い申し上げます。

2012年3月

一使って覚える—

楽しい漢字・2

山目石川速晚中妻安作静姉食
店足男名泳門帰近兄酒左
大肉少花朝右
父行会
村海気
作低雪親語閑動兄遅私
屋午有寺駅待村
市手飯女住西電
小着早弟降遠高
言外母下院入開

課	住所・申し込み 趣味	学習漢字	ページ
1	住所・申し込み	住所都京京市区町村番性様	
2	趣味	料理音楽歌絵映画写真旅運	
3	仕事・産業	仕事産業農工医者研究員屋	
4	季節	春夏秋冬変化暑寒暖冷涼光	
5	食事	野菜肉酒油味飯和洋作具焼	
6	安売り	商品物衣服場得価値割現限	
7	ごみ収集	別回収集以置資源紙類雑法	
8	体の部分2	頭顔齒鼻指感痛疲悪苦熱眠	
9	病院	病院薬局受付科診初再約計	
10	建物・場所	建図館民室堂美術公園遊港	
11	町中の表示1	危注意禁違反非関係有無満	
12	町中の表示2	管備定平需求願由取配使用	
13	お金・銀行	銀預残両記証支払貸借返送	
14	形容詞3	強弱太細忙若困難必要確實	
15	勉強	勉教習考覚忘問題質質答説知	
16	試験問題	試験点合単表適当形同正直	
17	テレビ・新聞	治経育庭情比放連続故死原	
18	漢字ネットワーク4 反対のことば	成失敗増加減勝負笑泣喜悲	
19	漢字ネットワーク5 部首	客宿荷落結緑相機橋橋伝健履	
20	漢字ネットワーク6 部首	決消過選欠次議論調神祝祭	

住所都京京市区町村番性様

1課

住

すむ
ジユウ

1. 私は半年前から日本に住んでいます。
2. お住まいはどちらですか。
3. 両親の家は、静かな住宅地の中にあります。

所

ところ
シヨ

1. 先月引っ越したので、住所が変わりました。
2. 昨日、うちの近所で火事がありました。
3. 日本で一番行ってみみたい所はどこですか。
4. アパートの台所は狭いです。

都

みやこ
トッ

1. 都会の生活は便利です。
2. 仙台市は東北で最大の都市です。
3. 都合が悪い時は、連絡してください。
4. バリは「花の都」、ヴェニスは「水の都」と言われています。

京

キョウ
ケイ

1. 日本の首都は東京です。
2. 京都是日本の古い都です。
3. 京都から大阪まで京阪電車に乗りました。

練習1

この漢字は何ですか。漢字と読み方を書きましょう。

- ①  () () () () ()
- ②  () () () () ()
- ③  () () () () ()
- ④  () () () () ()
- ⑤  () () () () ()

練習2 正しい読み方はどちらですか。

1. 住所 { a. じゅうしよ b. じゅうしやう } 2. 首都 { a. しやとう b. しやと }
3. 女性 { a. じよせい b. じようせい } 4. 町内 { a. ちやうない b. ちよおない }
5. 台所 { a. だいどころ b. だいところ } 6. 番号 { a. ばんごお b. ばんごう }

練習3 次の文を読んで間違いを直しましょう。

- 京都は日本の古るいの都です。
- 場所が分らないので、交番で道を開きました。
- 私が住でいる池区は、外国人が大いです。
- 昨日の午後、うちの近所で家事がありまりました。
- 町田さんは明かるい生格です。
- となりの町に姉が往んでいます。

練習4

同じグループに入らない漢字を一つ選びましょう。

1. 明・道・速・広・遅 () 2. 投・待・持・折・打 ()
3. 地・町・区・村・県 () 4. 市・自・止・私・四 ()
5. 軽・座・立・住・寝 () 6. 性・生・静・暗・学 ()

練習5 漢字で住所を書きましょう。

けん 仙台 し 青葉 まち 丁 ばん ち ごう
管城 仙 台 青 葉 丁 2 3

練習6 次の文を読んで () に漢字を書きましょう。

日本はアジアの^①() 側にある島国です。^②() 道・本州・
^③() 国・^④() 州の四つの大きな島と、たくさん小さな島から
できています。日本で一番人口が多い所は、^⑤() です。^⑥京()
は古い都です。一番北の県は^⑦() です。一番^⑧() の県は沖縄
県です。日本は南北に長いので、桜の咲く時期も、南と北とでは1か月
以上の違いがあります。

- ① () ② () ③ () ④ ()
- ⑤ () ⑥ () ⑦ () ⑧ ()

♪書く練習をしましょう。

住	ノ	イ	イ	仁	住	住		
すゝむ ジュウ (7)								
所	一	マ	マ	戸	戸	所	所	
ところ ショ (8)								
都	一	キ	キ	ネ	者	者	都	都
みやこ ト・ツ (11)								
京	一	一	一	市	市	京	京	
キョウ ケイ (8)								
県	一	口	月	目	目	県	県	県
ケン (9)								
市	一	一	一	市	市			
いち シ (5)								



漢字の力～仲間漢字で覚えよう

☆「主」のついた漢字

「主」は、ロウソクが燃えている形で、「動かないで立っている」という意味です



主 動かないロウソクの火 → 家の中心 *主人

住 人が動かないでいる *住む

駐 馬が動かないでいる *駐車

柱 木が動かないで立っている *柱

注 水や油を静かに少しずつ入れる *注ぐ(11画)

☆音読みも似ています

主 (シュ) 住 (ジュウ) 注 (チュウ)
 駐 (チュウ) 柱 (チュウ)

パネルセッション「ポスト 3. 11 の沿岸被災地の日本語教室、これからの役割、つながりについて」記録

登壇者：村上伸子さん（気仙沼市震災復興・まちづくり推進課）

清水孝夫さん（石巻市 国際サークル友好 21）

杉山美恵さん（石巻市 国際サークル友好 21 台湾出身）

佐藤金枝さん（南三陸町国際交流協会 台湾出身）

大泉貴広（宮城県国際化協会）

大泉：

まずこの午前中のパネルセッションの趣旨について簡単にお話しいたします。通常こうした会議、セミナーやシンポジウムですと、まず初めにテーマに即して基調講演があって、その後にパネルセッションという流れになるのが一般的なんですけども、今回のネットワーク会議の中身について実行委員同士でまず検討した時に、今回のテーマ「震災後の沿岸被災地の日本語教室の新たな動きとこれからの協働」ということを考えた時に、専門家の方にお話をいただくというよりも、実際に現場で活動をされている方々がそれぞれどんな経験をされて、それを踏まえて何をお考えになって、今どんな取り組みをされているか、ということについてお話をいただいて、それを皆で共有するという時間をたくさんとったほうがいいのではないかと、ということになりまして、このような流れになっています。

今日登壇されている方々は、皆さん、それぞれ津波で甚大な被害を受けた地域にある日本語教室で活動されている方々です。皆さんご自身が大変な被災をされながらも、周囲の人たちのために立ち上がり、素晴らしい取組をされている方々ばかりです。

では、登壇者をご紹介します。気仙沼市震災復興まちづくり推進課の村上伸子さんです。石巻市の国際サークル友好 21 の清水孝夫さんです。同じグループ国際サークル友好 21、そしてハッピーママの会という新たなグループを立ち上げられた杉山美恵さんです。台湾のご出身です。南三陸町国際交流協会の佐藤金枝さんです。金枝さんも台湾ご出身です。

今日の流れなんですけれども、お一人ずつ簡単にそれぞれの震災後の経験、それから今の取組についてお話をさせていただきます。そのあとにお一人ずつの報告を振り返りながら、それぞれの報告についての他の登壇者の方のご意見などを交えながら意見交換をしていきたいと思います。もし時間がありましたら、フロアの方からもご質問をお受けしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。では早速ですが、村上さんから外国籍女性被災者への就労支援プロジェクトということについてお話ししたいと思います。

村上：

改めまして、こんにちは。気仙沼市から参りました村上と申します。今ご紹介にあずかりました私達の日本語教室なんですけれども、気仙沼市、今、震災のあと震災復興という名前が付きまして、震災復興まちづくり推進課という課内にある気仙沼市小さな国際大使館、これは部署でもなんでもなくて、いわゆる通り名といいますかニックネーム的なところなんですけども、ここが日本語教室を主催しています。私がこちらに来てからずっと日本語教室のお手伝いを仕事の一部としてやっております。今日は 3. 11 の後の日本語教室の取組というテーマなんですけども、日本語教室のなかでも、特に去年私達がやった事業のなかで、良かったなと思うものが一つございまして、それをご紹介しますと思います。

実は去年、震災の後、私達の部署も津波で全部の事務所が流されまして、データから文書から、小さな国際大使館の成立後 10 年だったんですけども、その成立以来の資料も一切切が流されまして、そういう状態になりました。まちづくり推進課の機能も、しばらく事務所がないものですから、市の機能としても働かずに、一週間から 10 日ぐらいですね、職員も避難所のほうに詰めていましたので、まちづくり推進課というものが消滅していた期間もありました。

私が日本語教室以前にここに復帰したのが、まず 5 月。私も被災してずっと避難所暮らしをしていましたので、復帰したのが 5 月で、このプロジェクトがちょうど一か月後、6 月から始まります。こちらに事業実施期間が 2011 年の 6 月から今年の 3 月までとありますけれども、6 月にあるきっかけからですね、このプロ

プロジェクトが始まりました。その内容というのがですね、ちょっと資料前後しますけれども、東京にある NPO 法人難民支援協会というところがありまして、通称 JAR というふうに皆さんおっしゃってますけれども、この関係者が被災地で支援しておりまして、たまたま気仙沼市の日本語教室を外国人の関係部署ということで訪ねていらっしやいました。全く何の知識もなくいらっしやったそうだったんですが、そこで私が対応した時に、被災した外国籍の方々、主に女性が多いんですね、沿岸地域というのは皆さんもご存じのとおり結婚して定住している外国人がものすごい数いて、その方々がほぼ全部占めているという状態ですね。その方々の多くが仕事を失いました、震災で。被災しました。仮設暮らしの方も多々いました。ということで、支援をしたい、と。この方々に仕事を見つけてあげたい、という支援の話を持ってこられました。

流れとしてはですね、ホームヘルパー2級の資格を取り、介護の分野で就職を果たすと、そういう明確な目的でいらして、私達との話し合いのなかで、まず、何が出来るかということのなかで、難民支援協会はスポンサーとして資金のほうの支援をさせていただきます。私達は被災地にいる地の利がありましてね、東京の方々が毎回来るわけにはいきませんので、私達が日本語教室なりのリソースを使いまして、その支援をします。なんでここで日本語教室が関わるかと言いますと、外国人がホームヘルパーの2級を取るために必要なのが日本語学習。特にフィリピン人が多い場合ですと、漢字が読めない、字が読めない、そういうことがあります。そのテキストを解説するところから勉強が始まりまして、そのために日本語教室が必要だということまでいきました。

私どもの日本語教室もばらばらであったんですが、これをきっかけに、集まるきっかけもできまして、ボランティアさんも集まるチャンスにもなりまして、私達講師が漢字やらの勉強のお手伝いをしつつ、東京のほうで用意してくださった資料などを使いながら、いわゆるコラボをしながら勉強会を開き、それを3回のグループに分けて勉強をしました。本当に長い長い時間がかかりましたし、努力も苦労もあったんですが、結果的には24名がこのプロジェクトでホームヘルパーの資格を取りまして、そのうち半数ですね、昨日の時点で12名の方が介護の分野に就職しております。ということで成果が上がったし、すごく早くその結果が出たということでは、こっちもちょっとびっくりしているところですね。

そして私達はすごく明確な目的がありまして、日本語教室を漠然と使うのではなく、資格を取らせるという目的の基にありましたので、そこに向けたアレンジとか、人の割り振りとかは、私がやりました。東京の方々は資金力がありますけれども、気仙沼のことは知らないの、私どもの人脈を使ったりとか、あとは、私は市役所の職員なものですから、市の施設を使うことが出来たというのもメリットだったと思っています。気仙沼にいらした方はご存知かと思いますが、本当に甚大な被害です。建物も流されまして、市の公民館も主なものは半数以上流されました。使える公民館は本当に少なくなりまして、場所がないというのも大きな悩みでしたが、それもなんとか乗り切りました。

もう一つ特徴としてはですね、フィリピン人の方々がこのホームヘルパーの話に入ったんですが、その後声をかけることによって多国籍の方々が受講するようになりまして、結果的には24名3か国、フィリピン、中国、チリの方々です。韓国の方にも声をかけたんですが、途中で辞めた方もいらして。この多国籍で勉強できたというのも大きなメリットでした。一国籍に偏らずに皆さんに同じように支援ができたといういいアピールになったとも思います。

そして、その後なんですけれども、難民支援協会とのコラボは今年の3月でいったん終了いたしました、私達の成功を聞きつけてですね、他の支援団体さんが声をかけてくださりまして、ちょうど今12月なんです、今年になってもう一つホームヘルパー2級の勉強会というのがあって、ちょうど終わったところです。また新たに7名が今年中にヘルパーの資格を取るという見込みであります。

というふうに私達も日本語教室の実績としてホームヘルパーのことが出来るといういいチャンスにもなりまして、ボランティアの方々も今まではお客さん、お茶飲み会のお仲間のようなノリで日本語教室をやっていた方もいましたけども、明確な目的があって勉強をするということも、ボランティアの方々もよく分かったと思います。フィリピンの方々が漢字で苦労しているのを見て、改めて日本語の学習の苦労というものがわかった、とおっしゃった方が何人もいました。

ということでこの事業は来年の3月まで現行のものを続けたいと思っています。あと1グループを今は考えておりますけれども、気仙沼の方約50名弱ぐらいの方々が、気仙沼の外国人250名ぐらいですからね、40名、50名の方が有資格者になれるということは、すごく大きなことではないかと思っています。そしてこ

の分野、ここからですね、介護の世界に外国人が働ける道を作ったというか、そういうきっかけ作りにもなっていてほしいなと思います。事業所さんたちがもっと外国の方を受け入れてくれるような、そういう流れになっていたらいいかなと思います。そのためにも私どもがやった事業のなかで資格を取ったフィリピンの方々が活躍してまして、とてもいい評判を得ているようなので、そこらへんもこれから期待するところ大だと思います。

ということで今日は難民支援協会と組んだ外国籍女性被災者就労支援プロジェクトのみお話しさせていただきましても、それ以外にも普通に日本語教室を開いております。これからは試行錯誤しながらですね、人の役に立つ日本語教室でありたいと思っております。

大泉：

ちょっと写真のほうを。

村上：

これが難民支援協会が初期に入ったころですね、4月、この方々は岩手県にいらしたんです、遠野、花巻あたりから活動を始められて、沿岸地域に来てだんだん南下してきたんですが、フィリピン人の方々に何が必要かという聴き取り調査をしております。

これは気仙沼のフィリピン人の方の倉庫ですね。ここも被災しましたが、ここが物資の集積所になりまして、かなり何か月もフィリピン経由で来る物資の配布をしておりました。

これは法律に関する相談会を開いたと聞いております。私どもはまだここは関わっておりません。

これも気仙沼市内です。初めてホームヘルパーの勉強というものを具体的に示しております。教科書を示して、ルビ付きではない日本語を見て不安げな顔をしております。

6月。これがお勉強会初ですね。右側下にいらっしゃるスーツの方が東京からいらした日本語の先生です。これは難民支援協会の方が頼んで連れてきてくださった方です。

ここから私が参加しておりますが、勉強会、ここまではですね、個人のお宅を使って勉強していました、場所がないものですから。ここで私が参加し、日本語教室でやりましょうという流れが始まったばかりです。

公民館で勉強しております。これは先輩のフィリピン人女性、群馬の方なんですけども、皆さんにホームヘルパーの勉強のコツなんかを教えてくださいますね。

これをきっかけに日本語を勉強しようという初心者のフィリピンの方々のクラスも急遽設けまして、平仮名、カタカナを今叩き込んでいるところです。

これが第一陣のグループの最後の日なんですけども、記念写真を撮りました。

ここでちょっと言い忘れましたが、すごく大事なことが、ニチイ学館さんと組んで勉強したんですが、教科書には全く漢字にルビがございません、その漢字をどうするかという問題の時に、東京にいらした先生方が、まず難解な文章の日本語を簡単にするという作業をしてくださいました。何10ページ、何冊もあるものを全部そうしたうえに、ルビを振ったものを印刷しなおして、編集しなおした私ども独自の教科書を作りまして、それをお渡ししました。そうすることによって、わかり易い日本語と漢字が読めるという二つのメリットがありまして、これをする事でフィリピンの方々が初めて介護の勉強ができたわけです。そうでなければ、既存のテキストではとても無理だったと思います。

これ、右側ですね、ルビを振ってあります。始めは手書きだったんですが、そのうち、印刷しなおすサービスがありまして、それを利用しまして、きちんとした印字のものを使うようになりました。

これは私が作った教材なんですけども、大きな文字にすることによってトイレに貼る、お風呂に貼るって言うものですから、大きくしてあげまして、これを家じゅうに貼って勉強したなんてことを言っていました。

これが実際の実技、スクーリングですね、全部で8回です。これもニチイ学館の先生が出張で来てくださりまして、私たちのクラスのためだけに出張して授業をやってくださいました。

これが第2弾グループ。フィリピン人に加えて中国人が合流しました。

これは交流会ですね、レポートを提出しなければいけないものですから、その添削作業をしつつ、皆さんの報告。この場に何人かの日本人のボランティアさんがいらしてくださって、一生懸命添削作業をしてくださっています。

これが第三弾、一番最後のグループになりました。ここでやはり6人のフィリピン人が勉強しました。上の写真は、やはり日本人のボランティアさんと一緒に勉強しているところですね。

これが実際に実技と言いまして、働き始めた様子ですね。

ということで難民支援協会さんが作った資料を使わせていただきましたけれども、これはMIAの方が撮ってくださった写真ですけども、東京から先生がいらっしゃらないときは私が教師を務めさせてもらいました。着物の方はボランティアさんですね。

大泉：

これ、間に入って受講生が学習するのをサポートされているということですね。

村上：

暑い夏だったんですけども、こんなふうには半袖から長袖の季節まで勉強したな、という感じですね。

漢字を貼って勉強しています。振り返り、あるいは言わせたりとか。

詳しくはここにある一枚ものの資料をご覧くださいますと、お分かりになるかと思います。ここに書いてあるものの何十倍の協力、努力、いろいろありましたけども、端的に書かせていただきました。

大泉：

ありがとうございました。まず村上さんから外部の支援団体、NGOとの協働で就労支援というプロジェクトで着実に成果を挙げたというお話をいただきました。あとでまた確認をしながら振り返ってみたいと思います。続いてお隣り清水さんから東日本大震災後の在住外国人の支援活動についてお話しいただきます。

清水：

どうも皆さんこんにちは。石巻で日本語教室を開設しております国際サークル友好21の清水と申します。私はこれから3.11東日本大震災の震災後における在住外国人の支援活動ということで、私が体験したことをお話ししたいと思います。

本題に入ります前に、東日本大震災の最大の被災地と言われております石巻市の被災状況と、それから石巻地域における震災前と震災後の外国人登録者数がどのように変わったかということについて、まずお話をしたいと思います。

皆さんご承知のように昨年の3月11日午後2時46分、国内観測史上最大と言われますマグニチュード9.0、それから高さが7メートル以上の津波が発生しまして、石巻市の沿岸部の工場地帯、水産加工地帯も含めまして、漁村の集落や中心市街地まで津波が押し寄せてまいりまして、石巻市が甚大な被害を被ったわけでございます。今年9月末の東日本大震災による石巻市の被災状況によりますと、津波で亡くなられた方が3,121人おりました。また行方不明になってしまった人が465人、合わせますと約3,500人以上の市民が津波の犠牲になってしまったということです。また、この津波に家が流されたり、あるいは全壊した建物が22,357棟あります。また、半壊とか一部損壊を含めると、実に建物の被害は53,000棟に及んでおります。

避難をされた方も5万人を数えておりまして、今でも多くの市民の人たちが仮設住宅、あるいは借上げアパートで大変不自由な生活をしているのが実情であります。避難者5万人と言いますと、石巻の人口が今15万人ぐらいですから、3分の1ぐらいの人が避難をしたということです。

私ども国際サークル友好21が運営しております日本語教室も、会場であります中央公民館が避難所になってしまったために、平成22年度の閉講式、あるいは平成23年度の開講式が実施できなかったわけです。従いまして、教室も休まざるを得ないという状況になってしまったのであります。

その後日本語教室はお蔭様で学習者の皆さんからは是非勉強してみたい、またみんなと会ってお話したいという熱意と声に背中を押してもらいまして、震災後、6か月後ですね、10月に別な会場を借りまして、再開することが出来ました。また、今年の7月からは中央公民館が避難所でなくなったため、会場を元に戻して震災前と変わらない活動がお蔭様でできるようになりましたのも、ひとえに宮城県国際化協会さんを始め、各地の日本語教室の皆さまからいただきました温かいご支援のお蔭でありまして、この場をお借りしま

して、心から感謝申し上げたいと思います。被災されて、教材等を全て失った学習者、あるいはボランティアの先生もおりましたので、こういった支援によりまして、無償で皆さんに提供することが出来たということです。

次に石巻地域の外国人登録者数ですが、震災前の外国人登録者数は、石巻市が785人、隣町の東松島市が115人、そして女川町が219人ということで、2市1町で1,119人の外国人が石巻地域で在住しておりましたけれども、それが震災後の平成23年度末の外国人登録者数を見ますと、なんと533人と半数近くが減少しまして、2市1町石巻地域全体で、わずか外国人登録者が586人になってしまったのであります。

なぜ、外国人登録者が半数近くも減少したかと言いますと、皆さんもご承知のように、東日本大震災と福島原子力発電所の事故によりまして、各国の大使館が宮城県内石巻市にも参りまして、自国民を守るために帰国指示を出されたり、それぞれの国の留守家族から帰国するように言われまして、実習生とかALTのほとんどが帰国してしまったと。そのために外国人登録者数が大幅に減少してしまったということでありまして。

しかし、実習生とかALTの方々が帰国したことによりまして、一時的に外国人登録者数は減少しましたが、永住者とか日本人配偶者の人たちの数は震災前とあまり大きな変化はありませんでした。皆さんの地域と同じように石巻地域に在住している外国人の殆どの人たちは中国や韓国あるいはフィリピンなどの近隣諸国やペルーとかブラジルなどの中南米等から日本のお嫁さんに来られた人たちが大変多く、沿岸部の漁村、あるいは周辺部の農村などに散在して暮らしている、というのが石巻地域の特性です。

また、これらの外国人のお嫁さんたちは、震災のときに、多分、自分の国に帰りたいという気持ちがあったと思われましても、ご承知のとおりこの人たちは家族があるわけですし、子どもの教育のこと、何と言っても生活の基盤がありますから、自分たちの国に帰るといふような選択をしませんでした。従いまして、震災前と比べてもあまり大きな変化はなかったということです。従いまして、震災後の生活のことや子どもの教育のことなど、外国人のお嫁さんたちが抱えている様々な問題は、そのまま取り残されているというのが実情ではないかと考えられます。

それでは、次に本題に入らせていただきますが、これから3.11東日本大震災後に私が体験した在住外国人の支援活動についてお話をしたいと思います。まず初めに中国人実習生の行方不明者の搜索と帰国支援についてです。当時石巻市には友好都市であります中国の温州市から106人の実習生が来ておりまして、石巻の水産加工会社で働いておりました。地震発生後、4、5日ぐらいいしてからだと記憶しておりますけれども、温州市人民政府の外事弁公室の日本語通訳をしております、ギューハッキョウという人から、実習生106名のうち、19人の実習生の行方がわからなくなっているとの、至急探してほしいという緊急の電話が私に入ったのであります。

どうして、温州市人民政府から私に緊急の電話が来たかと言いますと、震災の当時に電気、ガス、水道、電話などの全てのライフラインがストップしてしまっていることと、実習生が働いております水産加工会社が津波で壊滅状態になったと、また、石巻市や実習生の受け入れしている商工会議所も連絡が全然とれない、それがために私の連絡が入ったということですが、たまたま、私が温州友好交流協会という市民の交流団体の事務局長をしておりまして、温州市人民政府の関係者と交流があったことと、私の知人で石巻で中華料理店を営んでいるチョウホウメイさんという人がおりまして、この人の携帯電話が唯一の連絡網ということになって、その方の携帯電話を通じて、私に要請の電話が入ったということです。

既に温州市人民政府のほうでは、実習生106名のうち、87人の実習生が水産加工会社の適切な配慮によりまして無事避難していることがわかっておりますので、お金がいくらかかってもいいから、是非、なんとかして19人の実習生を探し欲しいというふうな、かなり切迫した要請の電話でありました。

私は温州市人民政府からの緊急の搜索要請を受けまして、早速、自動車が全然動かないものですから、自転車で石巻市と受け入れ機関であります商工会議所に出向きまして、対策を協議し、三者で搜索することになったのではありますけれども、実習生が働いております水産加工団地や宿舍、これらは津波によってほとんど壊滅しておりまして、何もかもなくなっておりますことから、初めにどこをどう探したらいいのか、全く見当がつかなかったわけです。とにかく、津波で破壊されずに残っていて実習生の宿舍になっているアパートが一つあるものですから、そこに行ってみようということで、瓦礫の山と浸水で泥だらけになった道を通りながら、宿舍に行ってみたのですが、既にそこには人の気配は無かったということでした。

幸い各避難所に市の職員の人たちが配置されておりまして、情報を収集したところ、高台にある小学校の体育館に中国人の実習生らしい人が一人いるということがわかりまして、行ってみたところ、やっとその一人を見つけ出して、救出することが出来ました。

その後、救出した実習生の携帯情報等から内陸部にある高校の体育館に8人の実習生がいました。また、漁港背後地の高台にあります、法山寺というお寺があるのですが、このお寺に7人の実習生が避難していることが判りました。また、残りの3人の実習生も、会社の社長の車で避難していることがわかりまして、行方不明になっている19人の実習生、全員無事であることが確認されたことから、石巻市が災害緊急車両2台を出動させまして、全員、石巻市役所に集合したということでもあります。

搜索を始めてから5日目ごろだったと思いますが、救出した実習生を石巻市がチャーターしたマイクロバスで新潟空港経由で温州で帰ってもらったのであります。当時は仙台空港が津波で使えなかったために、新潟空港経由で帰ってもらえたのですけれども、一人の犠牲者もなく、全員無事帰国させることが出来たということで、市も商工会議所も私どもも本当に良かったなと安堵しているわけでございます。

それでは次に震災後の在住外国人の支援活動ということで、私が体験したことをこれからお話しします。まず私どもが初めに取り組みましたのは、日本語教室の学習者と卒業生、それにボランティアスタッフの安否確認でした。震災後、二週間ぐらい続いておりました停電が解除されまして、電話や携帯が使えるようになったことから、学習者とスタッフみんなで手分けをして、お互いに安否の確認をしあったわけです。その結果、津波で家を流されたり、それから家が全壊してしまって避難所生活を余儀なくされた人や中には津波で大切なご家族を亡くされた人もおりまして、学習者とスタッフの約半数以上の人が被災していることがわかりまして、改めて津波の恐ろしさを感じたのであります。幸い学習者本人とスタッフ本人の中に一人の犠牲者もなくみんな無事だったことがせめてもの救いでありました。

次に取り組みさせていただいた支援活動ですが、宮城県国際交流協会、現在の宮城県国際化協会が実施した沿岸部被災地の避難所回りに私が同行させてもらって、石巻地域在住外国人の安否確認と巡回相談のお手伝いをさせていただいたことです。実は私達国際サークル友好21が、自ら在住外国人支援ということでサポート体制を立ち上げたわけではありません。宮城県国際交流協会の今日もおいでになっておりますが、大村課長さんを初め大泉さん、伊藤さん、これらのスタッフの皆さんが、震災後いち早く沿岸部被災地を土日を返上して手弁当で巡回をされました。そして石巻地域の避難もまわってくれたのですが、私も同行させていただきまして、MIAのスタッフの皆さんが熱心に外国人の安否確認と相談に乗っている姿を目の当たりにして、大変感動したのであります。

せめて石巻地域だけでも支援のお手伝いをしなければと思ひまして、私は引き続き、宮城県国際交流協会の方々やあるいは石巻市の市民相談センターと連携をしながら支援活動のお手伝いを続けてきたというわけでもあります。それでは、どのような支援活動をしたのかと言いますと、私達が主に支援をさせていただいた在住外国人の人たちは津波で旦那さんや大切なご家族を亡くしまして、誰にも相談できる人がいなくなってしまった外国人のお嫁さんたちであります。その支援の内容ですが、殆どが罹災証明書など市役所に申請するためのいろんな手続きのサポートでした。具体的にお話しをしますと、この人たちは津波で何もかも失っておりますので、まず、ホームセンターに同行しまして、申請に必要な印鑑を購入したり、また外国人登録証の再発行、住民票の復活手続きなどのサポートをさせていただいたわけです。

また、次に罹災証明書の申請、あるいは義援金、見舞金、生活援助金などの申請手続きのほか、銀行での預金通帳の再発行等々について、また、仮設住宅の申込み手続きなどについてのお手伝いをさせていただいたわけです。また、仕事中に津波で旦那さんを亡くされた人の場合につきましては、労災保険の申請相談のために労働基準監督署に同行させていただいたり、亡くなられた旦那さんの親が労災保険を不正に受給しようとしたということがありましたので、弁護士に相談するために弁護士の無料相談会に付き添ったり、そういった支援もさせていただきました。

震災後の混乱した状況の中での申請手続きですが、朝6時ごろに避難所を出まして、それで7時ごろから行列に並んで整理券をもらうんですね。整理券をもらった後に、今度、午後4時ごろ、また行列に並んで、やっと申請手続きが出来ると。このような期間が何日も何日も続いたわけですが、時間と労力、エネルギーというのは本当に大変なものであります。また、多種多様な申請用紙ですが、漢字が多く、外国人の皆さんにとっては難解なものばかりでですね、正直なところ、皆さんは何が何だかわからないというのが実情で

ありました。少し日常会話が出来た外国人の方であっても、実際には漢字が書けないとか、読めない、あるいはよく意味が分からないという人が殆どですので、名前とか住所につきましては、本人署名ですから、被災をされて旦那さんを亡くされた外国人の人たちにとりましては、この申請手続きは大変苦勞されたのではないかと思います。

このように震災後における在住外国人の支援活動に際しましては、さまざまな問題がたくさんあったわけですが、私は在住外国人の支援活動を振り返ってみまして、今後こうあってほしいなあ、ということを感じたことが三つほどありましたので、最後にこの三つのことをご紹介します。私の体験の話を終わらせていただきたいと思います。

まず一つ目ですが、私達ボランティアによる支援活動には限界がありますので、在住外国人も高齢者とか障害がある人と同じように災害弱者だと思いますので、防災や医療あるいは福祉などの公的な機関が連携をして相談窓口を一本化するとかあるいは迅速に対応できるような支援体制があったらすごくいいのではないかな、ということを感じました。

次に先ほどもお話ししましたように罹災証明書などのいろいろな申請用紙ですが、わかりやすい日本語にするとか、漢字にルビを振ってくれるとか、できれば多言語にしてほしい、ということと、三つ目としまして、外国人の方々も地域で暮らしている一人の市民でありますから、日常の災害の対応として、町内会や隣近所の単位で在住外国人の情報が常に把握されていることと、あるいは外国人がいつでも気軽に参加できる防災訓練の実施やそれから外国人の方々でもわかる防災情報の提供など、いろいろと地域ぐるみの取組が必要なのではないかなということ強く感じた次第であります。

いろいろと取り留めのない話をさせていただいて恐縮ですが、以上申し上げまして、私が体験しました東日本大震災の震災後における在住外国人の支援についてのお話を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

大泉：

ありがとうございました。清水さんのほうもいくつか写真を持っていますので、皆さんにもご覧いただきたいと思います。

まず、これは先ほどご紹介ありましたように、我々が清水さんに避難所をご案内いただいたときのある避難所となっていた小学校の様子ですね。

清水：

鹿妻小学校ですね。

大泉：

続いてこれが真ん中にあるのが、中国出身の方で、この男性の方が被災されてお母さんを亡くされてしまったということでしたね。

清水：

真ん中の方がジョーさんという中国出身の方で、私の日本語教室の学習者なんですね、お父さんお母さんも中国の方で中華そば屋さんをやっておられた。お手伝いをしていて、日本語の勉強に来ていた人なんです、ジョーさんが、被災されてお母さんが津波で流されて亡くなってしまった。いろいろとお話しをしていただいているわけですが、この時点で既に仮埋葬ということで、火葬ができないために、そういった手続きもジョーさんが一生懸命されたということで、実際私どもの支援は出来なかったんですね。ですから、慰めてあげる言葉とかしかないわけですが、その後帰国されて音信不通というところで、私どももお手伝いできなくて残念だったなと思っております。

大泉：

私どもに最初に相談いただいていた、現地でたまたまお目にかかったという方なんですけども、ご遺体の火葬の手続き等について、事前にこちらで相談を受けたり、ということもしていました。

これは、震災後に5月、6月に私達が各地で開催していた「東日本大震災を振り返る会」という被災された外国出身の方に集まっていたいて、それぞれの被災体験を共有してもらおう、という会だったんですけど、このときも清水さんにも声掛けに協力していただいて、この時50人以上集まったんですよ。

清水：

ええ、大変いい機会を作っていただいた感謝しておりますけども、約50名ぐらい、二市一町、石巻、桃生、牡鹿ですね、地域に住んでいらっしゃる外国人の方々に集まっていたいたわけですが、半数位が被災されておりました。ご家族を亡くされた方もおります。これを開催していただいたことによって、自分たちの気持ちを全部吐き出して、それから、また勉強したいのをお願いできないかというお話がこの時点からできてましてね。それで6か月後に再開した、ということになったわけです。

大泉：

この時も清水さんを始めとする友好21のネットワークに非常に助けられました。清水さんのお話の後半で私達が被災地に出向いて行ったのを受けて、支援活動を始めたということをおっしゃっていただきましたけども、逆に言わせていただくと、我々も清水さんのような地域のキーパーソンがいたからこそ、支援活動が有効にできたのかなと非常に思っておりまして、大変感謝しております。清水さん貴重なお話ありがとうございました。

続いて同じグループ、国際サークル友好21のメンバーで、それから、つい最近ハッピーママの会という、友好21から生まれた新しい会を立ち上げられた杉山美恵さんにお話しいただきたいと思います。

杉山：

こんにちは。杉山美恵です。台湾出身です。日本に来て29年、もう、はや30年になるんですね。私、今、違うところに住んでいるんですけど、実は被災して家が全部流されて、体一つ、命が助かったという状態で、最初の避難所にいた2週間ですらとても辛い経験をして、そのあと、環境少しいいところに避難所を変えて、子どもと少し安全な場所に今住んでいるところです。

読み書きとか、少しは出来て、普通の日本に来てから日の浅いお母さんたちに較べると、すごく不便ではないですね。なんとか一通りなるんですけど、でもこの震災は予想以上にすごくダメージを受けたんですね。二つ目の避難所に入った時、少し一息ついて、仲間たちはどうなったのでしょうか、たまたま残った携帯一台しかない、この携帯を使って友達の連絡網の中でかたっぱしに電話を掛けました。電話に出たら生きている、出なかったら、どうなったのかすごく不安な日々を過ごして。その連絡をとれた方から、誰がいるの？生きているの？どうしたの？という感じで、友達と連絡を取り合って、その後、今はハッピーママの会をつなぐ連絡網にもなっています。

最初の一か月は、すごく大変だったんです。台湾は大使館は誰も探しに来てくれなかったんですね。私はどうなるのでしょうか、パスポートない、登録証ない、お金ない、石巻から出られない。どうなるのでしょうか、すごく不安で不安でたまらなかったんです。その時に、清水さんと大泉さんが避難所に安否確認作業で来てくれた時に、ものすごい、ああ、ようやく誰かが私のことを探してくれて、安心したっていうかなんて言うか、震災後、三週間ぐらいで初めて涙出たんです。悲しいわけではないですけど、涙が出るまま、ずっと避難所の外で一時間ぐらい号泣したのね。

そのあと、私もこんなに大変な思いをしてるのに、私の仲間たちは今の状態どうだろうって、ふっと気付いて、それで、車もないのだけれど、自転車に乗ったり、そのあと車が手に入ってから車で、会える人だけ、少しずつ会いに行くようになって、見ると、私と同じ状態の人がけっこう何人もいて、言葉も通じないし、交通手段もないし、これからどうやって生きていくの、すごく心細いっていうか、どうしようかっていうことで、頭の中がいっぱいでした。

避難所を出て、さてと、これからどうしようっていうことになって、まず仲間たちと話し合って、皆さん、ここにいるの、帰るのというのは、会うたびにそういう話題で。でも子ども達が学校にいるから、帰ったらどうなるんでしょうかというのも話題の中にあって。では、どうしよう、取り敢えず、子どもたちを安心させて、学校に通わせましょう、ということになりました。

学校に通うのだけど、何にもない。うちの子も同じ。ジャージで学校に通いました。書くものもないし、ノートもないし、二か月、何にもなしで教室に座ったんですね。こんなに不自由な生活させて、私ここで何してるんだろう、って思っていたら、たまたま知り合った方に古着をもらって。「教科書はないですか」と聞いたら「教科書はないけど、ノートぐらいはあげられるよ」、「使い古した教科書だったらどうですか」って言われて、辞書から少しずつもらって、それで高校に通ったんですね。

いろんな人からの温かい気持ちをいただくのは嬉しいことなんですけど、不安でしょうがないの。仲間たちが集まると、どうしよう、どうしようっていうことしか出てこないけど、そのうちに、どこか集まれる場所、ゆっくり話す機会がないかなって、ふと思って。集まれる場所、一息つける場所が欲しいなって個人的に最初思ったんですけど。この場所っていうのはとても大事なポイントで、日本語学習も大事ですけど、普通の生活のなかで必要なものを皆で話し合って手に入れる、必要な情報も手に入れるっていう場所が欲しかったんですね。

少しずつ少しずつ皆とじゃあ、次は何が必要って考えて。去年の時点では子どもたちの教育についての情報が一番欲しかったっていう話し合いの結果で、その他にも、生活するため仕事も欲しいという話になりました。誰からもらうの、という、援助してくれる方もいるんですけど、一番基本は、自分たちでほしいものは自分たちで決めなくちゃならないっていう結論が出て、それでお母さんたち何人か集まって、どんどん形が作られてきて、居場所を作りましょう、そこから欲しい物、必要なものを考えて、落ち着いたら自分から何か出せるものがあるんじゃないかっていう発想がでてきて、最近、月に一回、お母さんたちが集まって自分たちの母文化、言葉、食べ物、習慣もお互い紹介し合っ、集まって何か作ったりとか手作りの何かをしています。

それから、子育てについて、日本の場合は普通どうしているのか分からないお母さんも結構いるので、学校の生活はどうって少し話し合うようになって、今、日本のお母さんと外国人のお母さんたちが月1回の集まりで、結構集まってきて、いろんな話すごく活発に進むようになって、例えば、勉強の方法とか、日本のお母さんたちの子育て、すごく良くて、学校の保護者たちの関わり方と地域の人たちの関わり方もいろいろ教えてもらっています。それと、日本語教室で習う日本語、本当の正しい日本語なんだけど、普通の生活で使う日本語は、またちょっと違う。お母さんたちから習う生きた日本語もあって、すごく楽しい経験です。これも社会勉強の一つではないかと思えます。

最近、人の輪の中に日本のお母さんの輪の中に入って、仕事探したいっていうお母さんもけっこういまして、この中から、じゃあ、うちの近くにこういう小さい工場で来たんだけど、良かったら行ってみない、という声掛けもありまして、少しずつ地元に入れるようになったんですね。

そういった小さい集まり、小さい活動のなかで、何のために集まっているのか、どこ行くのか家族にも説明できない状態が続いていた中で、外国人のお母さんのなかから、じゃあ名前を付けたらどうでしょうか、という話があって。毎月、家族に「どこどこに行きたい」と伝えやすいようになったほうがいいんじゃないか、ということになって、「ハッピーママ」っていう名前を皆で相談して決めたんですね。月1回、家族に「この日お母さんに一日だけ休暇を下さい。お母さんハッピーママに行ってきます」っていうハッピーママの日を作ったんですね。ここに来ると、とても子育ての悩みとか、個人的な悩みとか、行政に対する何かしてもらいたいというちょっと硬いところに行けないと言うお母さんたちも、ここでは気軽に話せるような場所を作って、地域の地元の人たちと交流もできて、もっともっと住みやすい環境づくりにも役立つんじゃないかな、っていうところ、私の理想の居場所作りですね。

今、立ちあがって、まだ日浅いですがけれども、今後の目標っていうのはまだ全然見えてこないんですけど、ただ、私たち外国から来て、ここで定住している母親たちが住みやすい場所でありたい。ずっとここで生活して生きていかなくちゃいけない場所で、もっともっと地元に参加できて、なおかつ、少し社会に役立てるような会になればいいですね。そういうふうに活動が出来るように、少しずつ改善しなければならないものがいっぱいあって、皆さんから何か私たちにいいアドバイスがもらえたらいいです。少しずつ少しずつ成長してって、定着させたいと思っているので、よろしくお願いします。

去年から始まった会の活動では、「外国人の子ども・サポートの会」の力を借りて、子ども達に読み聞かせの活動をしています。最近あった集まりのなかで、少しずつ、お母さんたち交代交代で、自分の国の言葉で短い絵本を読んで聞かせるんですね。毎回違うお母さん、手が空いたお母さんに子ども達の相手をしてもら

って、自分の文化とか、言葉とか、意味わからなくても、こういうのもあるんだよというのを体験してもらって、お母さんたちの文化に興味持ってもらって。

あと、何でしょうね。お母さんが一番得意なのは料理を作ることなので、お母さんたちが毎回違う料理を作って、子ども達に食べさせて、地元のお母さんたちにも来てもらっていっしょに作ったり食べたりお話ししたり。本当に小さい小さい活動から始まっているので、これからどういうふうに成長するのか、方向性はまだ全然決まっていないですけど、できたら細く長く続けたいと思っています。ありがとうございました。

大泉：

ありがとうございました。震災をきっかけにして、自分たちが集う場所、ほっと一息つける場所を立ち上げて頑張っているというお話でした。

それでは最後に佐藤金枝さんから日本語教室再開に向けた取り組みについてお話ししたいと思います。

佐藤：

みなさんこんにちは。南三陸町から来ました佐藤金枝といたします。よろしくお願いします。拙い日本語ですけれども、皆さん聞いてください。つまりいたら大泉さんがフォローしてくれるそうです。お手元のプリントの箇条書きに沿ってお話ししたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、震災前の日本語教室のスタイルについてお話ししたいと思います。南三陸町の日本語教室は、公民館のカルチャー事業で、講師は1名、学習者は研修生、配偶者、配偶者が呼び寄せた子どもたちもいました。教室に中国出身の方が多いので、中国語を聴きに来る日本の方もいました。遊びに来てくれました。さまざまな在留目的と日本語レベルがバラバラなので、講師1人では対応しきれないところもありました。それで、たまたま私が町の国際交流協会の者でもありますので、協会にお願いを申し立てて、日本語教師ボランティアの養成講座の開催を働きかけました。

それで、役員の賛同を得て、県の国際化協会の協力をいただきながら、開催の日程までつめていました。さらに教室で日本語を教えるもいいよという先生、今日も会場にいらしているんですけれども、その先生の承諾もいただいたんですけれども、東日本大震災が起きて全て中断してしまいました。

次が震災直後のことなんですけれども、休止していた公民館の日本語講座なんですけれども、震災で町の協会、多くの役員や会員もすごく被災者が多くて、一番残念なのは、協会の担当者の方が犠牲者になってしまって、要は、つながりができる方、トータルで連絡できる方が亡くなってしまった。協会の活動ももちろんできないし、日本語教室としても活動していた公民館も全部流失して、公民館の活動も出来ないし、協会の活動もできないし、もちろん、日本語教室としての活動もできない、という状態でした。正直なところ、ああいう状況なので、養成講座の有無ではなくて、もう二度と日本語教室なんていうところではないよ、もう日本語教室のことは消滅していくんじゃないかな、というところでした。

少しずつ落ち着いてきて、町も人も落ち着いてきたので、ある日、一本の連絡が私のところに入ってきたんですけれども、それがその後の日本語教室に大きな役割を果たしてくれた方なんですけれども、協会の後任の方、事務局の担当者からの連絡でした。それから日本語教室の再開を目指して教室がなぜ必要かっていうことを考えた時に、日本語教室というのは、地域の中で唯一日本語を学べる場所だし、唯一外国人と顔を合わせるところなんですけれども、情報交換、母国語でわからないところで、母国語で情報交換が出来るところでもありました。さらに学習者からの問い合わせもありました。ある学習者の家族が、震災で亡くなったときに、例えば生活日本語が出来ても、家族が亡くなった、大黒柱が亡くなった時に一人で役所に出向いたり、公的機関からの書類を理解したりすることが困難だったということを私は身近に感じていました。見ていました。

町からのフォローもできなくて、個人レベルでのお手伝いしかできないという状態でした。気軽に自分の疑問や分からない日本語が聞ける、学習の場所があったらいいなという考えがあって、学習者の夫の話なんですけれども、学習者が一生懸命覚えかけた日本語を夫に話しかけるんですけれども、夫はもう慣れているし、言っていることを理解する前に「うんうんうんうん」という、そういう返事をしてしまうというケースがあって、要は学習者が自分が使っている日本語はどうなんだろう、相手に伝わるだろうかということを確認を

しないままにポンポンンって身内に言ってしまう、そういう外との日本語の使い方が出来ない。覚えたら、家に帰ったら夫としか会話できないから、言ってしまったら、夫も「うんうんうん」っていう曖昧な答えになってしまうし、覚えた日本語を適切に使っているとか確認が出来ない。それで、日本語教室の中では、そういう確認も出来たらいいかな、と思ひまして、相手の理解がなければ会話もなりたないし、自分が使った日本語を確実に使えたらいいかなっていうさまざまの思ひのなかで、町の復旧と復興とともに、協会も動き始めて、協会事業方針の中で、在住外国人の交流の部分で、日本語教室をフォローしてくれるのではないかな、と。それでそういう思ひのなかで予定していた日本語ボランティア養成講座の実施と日本語教室事業を協会の一事業として実行することになったわけです。

その担当者の事務局の方も役場の職員でもあるので、町の状況、混乱している状況のなかで一番把握しやすい人でもあるので、必要に応じて町との連携やバックアップももらえるんじゃないかと、そういう思ひの中で、ボランティア養成講座の実施にあたって、県の国際化協会から一番最大の協力を得て、例えば教材から講師の派遣など、いろんなアドバイスをいただきました。

開催すると同時にいろんな心配がありました。混乱している状況なので、本当に参加者いるんだろうか、という心配のなかで、トータルで仙台から、地元もそうなんですけれども、今日、会場にいらしている隣町からの参加者もいまして、11名の参加者がいました。その11名の参加者が、昨年の11月から4回コースを受講して、現在は半数、事務局の方を合わせて6名の先生たちが今回の日本語教室のボランティアになってくれて、更に県内および県外の教室も見学して、積極的に取り組もうとしていました。

教室の再開に向けた具体的な取組なんですけれども、見学した教室のことを参考にしながら、自分の教室の個性も出したいなと、事務局とボランティアの先生たちとの打ち合わせ重ねて、ようやく自分たちの時間割を作りました。皆さんの手元の資料の裏側にあると思いますけれども、その時間割の中で、今回の地震もあって、受講者に対して全体的な授業として、防災、あるいは生活関連情報、それを一番目に持ってきました。その次が基礎学習。発音とか読み書きに対して、共同で授業を行いました。そのあとにグループ分けして、レベルに合わせての授業なんですけれども、初心者コース、中級、漢字書き取りコース、その漢字書き取りコースなんですけれども、主にフィリピンの方の授業でした。その他っていうのは、日本語能力試験を受けたいっていう方がいまして、その方に対する指導でした。今度、また皆さん合流して交流の時間。今回の交流の時間のなかで、たまたま歌津出身の方が、震災復興大使になってくれて、その方の歌を、まきのまぐみさんの歌を、南三陸町のことをすごくきれいに作られた歌を紹介してました。その後に次回のお知らせとかを合わせた時間割を作りました。この講座は9月から11月にかけてトータルで10回を実施しました。

これが教室を再開した時の写真なんですけれども、これが開講式の時の写真です。フィリピンの方と中国出身の方と研修生、一番後ろに座っているのが配偶者の方なんです。立っているのは私ですけども、あとはボランティアの先生たちですけども。これは自己紹介の場面です。その後にテキスト、どのようなテキストがあるだろうと、テキストの紹介です。これがMIAから派遣してくださった鈴木先生とのテキストの打合せです。

これが実際に授業を行った時の写真です。これもその授業の様子なんですけれども、上が発音の五十音表と、下の写真なんですけれども、地元の写真を張り付けました。受講生の様子です。これが防災、生活関連を説明しているところなんですけれども、防災っていうのは地元の広報を使ったり、あるいはイラストを使ったりの説明です。

大泉：

金枝さん、このお話をされているのが、役場の職員の国際・多文化担当の方ですね。

佐藤：

はい。この方がうちの事務局です。氏家さんですね。閉講式の写真なんですけれども、受講生に対してボランティアの先生が修了証書を渡す場面です。

大泉：

ちょっと前に戻ってしまいますけど、これ養成講座のときの様子ですね。私が横からお話ししますが、

会場ですね、役場の仮庁舎の中にある会議室だったんですけど、ここ翌日町の議会が開かれるということで、その片隅をお借りしてこういった形で寒いなか養成講座を開きました。

佐藤：

これが再開した時の南三陸町の様子を紹介しました。これからのことなんですけど、ちょうど先週の土曜日に先生方と打ち上げ会プラス反省会をしたところなんですけれども、一致していることは、10回というのはあつという間の10回の講座で、教室に来るのが楽しい、次回来るのが待ち遠しいという意見、感想が多くて、まだまだ継続したいという希望、願望が多かったです。反省もあるんですけど、もっと取り入れたいものがあるんじゃないかと、防災情報としてはネタ切れた時にそういう先生たちとの打合せがもっと、先生たちとの話がもっと、アドバイスや話を、もっと機会が増えれば、そういう内容も充実していくんじゃないかと、たとえ、10分間を担当しているんだけど、自分の10分間ではあるが、みんなの10分間でもあるんじゃないかという反省もありました。もっと先生たちとの連携プレイでいきたいという。やる前にすごく難しく感じたという方もいらして、10回を経て、まず自分が出来るところからボランティアでやりたいという思いがありました。今度は11月でいったん講座終わったんですけど、平成25年、来年の2月から3月にかけてテーマ別で勉強会を予定しています。平成25年度から公民館事業と連携して、日本語教室を実施したいという話もありました。私の報告は以上です。ありがとうございました。

大泉：

金枝さんから南三陸町で日本語来教室に向けて取り組まれたというお話でした。ここまで四人の方のお話を伺ってきましたけど、私も皆さんの活動の概要は大体は分かっていたんですけど、今日、このように詳しく話を聞いて、新たに気付かされることがありました。ありがとうございました。

ここからはそれぞれの方のご報告を振り返りながら、登壇者同士いろいろな意見交換をして進めていきたいと思います。まず村上さんのお話に戻りますけれども、難民支援協会という外部の団体からの協力を得てこのプロジェクトを始めたということだったんですけど、なかなか外部の団体の方と協働をしていくということは簡単なことではないと思うんですが、村上さんという柔軟な取り組み方ができる方だったからこそなのかな、と思っているんですが、申し出を受けたとき、抵抗というのは特になかったんですが。

村上：

抵抗がなかったのはなかったです。なぜかという、外国人支援という、最近は外国人支援とは言わない傾向にありますけれども、あのときは外国の方々を助けたい、という存在がありましたよね。その方々がしたいということに私達も、是非、なんだろう、乗りたいというか、何かをしたかったということですね。つまり街づくり推進課当時のオフィスは倉庫のようなところで、パソコンもないような状態で仕事をしていましたから、何をしようかと。日本語教室はまず無理、春季は4月から開講ですけど無理だろうと、私自身が仕事にも出られず、自分も被災者なものですから、5月まで仕事に出なかったんですよ。ですから、もう無理でしょう、これからいったい何をしていったらいいんだろうか、という時期でもありましたので、こういうことをしたいんだという、明確なピンポイントのものを持っていたので、それはとても良かったです。話を聞くうちに、私達ができることがあるとすぐにわかりました。私達が提供できるものがあるということはわかったので、何の躊躇もなく。ただ、課内での調整とかはですね、市の一部ですので、私独自の判断では動けないというところが一番大きいですね。ただ、街づくり推進課のなかの小さな国際大使館って言っていますが、私しかいないんですよ。ですから、それをちょっと逆手にとって、自分がしたいことがなんでもできるという立場にいるものですから、そこいらへんをうまく説得する形を取りまして、やりたいです、ということで、やらせてもらいました。全面的に動いた職員は私のみです。ですから、そういう意味では、躊躇もなく、渡りに船という言葉がありますけれども、そういう感じでございました。あとは、やる意味があるということがすぐにわかりました。

大泉：

ありがとうございました。今のような外部の支援団体との協働ということについて、杉山さんもこのハッ

ピーママの会、さきほど、外国人の子どもサポートの会との連携でというお話でしたけれども、具体的にそちらの会とどういう形での連携を図っているか、もう少し教えていただけますか。

杉山：

去年から子どもサポートの会との連携で、まず、子どもたちに一番必要なものは何ですかというのは話し合っ、去年の時点では、子どもたちに、沿岸部の子ども達はまず環境が良くないです、勉強する環境。習慣があまり身についていない、そこをなんとかいい方向へ持っていくように、どうしたらいいでしょうか、と相談しましたら、勉強というものは、親がどうのこうのって言うて進むものではないから、一番ベストな状態では子どもに親が外国人っていうのを先にわからせるっていうか、親が教えられないよ、自分で頑張るしかないっていうのを、そこから始まって。楽しくやるには、一番いいのは、小さい時から本を読み聞かせをするのが一番いいんじゃないでしょうかっていう。去年の12月に多言語の本の読み聞かせをしました。その時はたくさん子どもたちが集まってきて、もちろん日本語しか話せない子ども達がたくさんいて、その他にこの言葉、こんなに素敵っていうのは感じたそうです。

帰りに好きな本を一冊ずつ持ち帰りいいっていうことで、帰りの車の中で本読みを始めた子ども達もいて、お母さんたちはとても嬉しいなっていう電話をいただいて、日本の勉強は学校にまかせて、他のことをやったほうがいいんじゃないかって。次も本の読み聞かせをやりたいっていうお母さんたちの要望があって、そのあと回重ねるうちに、どんどん形になって、だいたい少しずつ本の読み聞かせを組み合わせるようになって。

それと来年、高校の受験のシステムが変わるので、お母さんたち普段も受験全然頭にないのに、意味わからないっていうのを聞いて、どうしたらいいって相談したら、仙台では進路ガイダンスっていうものがあるって、それを石巻に持ってこれないかっていう相談をしましたら、開催するのは初めてなので、どうしたらいい、サポーターの会もちょっと戸惑ったみたいですけど、その後何回か重ねて相談して、石巻でも開催することになって、石巻市と共催で。そのとき、すごく多くのお母さんたちが熱心に聴きにきて、まだ小学生の子のお母さんも来て、ああまだ早いんじゃないかな、と思ったら、ちがう、今のうちすこしずつ勉強して、高校受験になるともう手遅れだと思っているそうです。今、小さなうちから、少しずつ親も勉強して、子どもの将来に関わる大事な進路ガイダンスを、一年じゃなくて二年、三年で少しずつ理解して勉強していこうっていう姿勢がとても見られて、進路ガイダンスが終わってから電話きて、「意味わからなかったですけど、もう一回教えてくださいませんか」っていう電話何本かあって、その都度、私達いままで子どもたちの教育とか環境について全然考えていない、手をつけていなかったんじゃないかなというのは感じました。で、子ども達だけじゃなくて、親たちもこういう勉強する場が必要ではないか、子ども達はどんどん大きくなって、自然にいろんな知識が自然に身につく、親たちは残されていくんですね。少しずつこういう勉強する場所も提供できたらいいと思っています。毎回毎回、サポートの会にお願いして、こういう話を聞いたんですけど、何かいいアドバイスないですかって、しょっちゅうお願いしています。

大泉：

はい、ありがとうございました。ちょっと補足しますが、外国人の子どもサポートの会という、外国に繋がる子どもをサポートしているグループが仙台市ありまして、そのグループとハッピーママの会が、今のお話ですと、本の読み聞かせですとか、進路ガイダンス、学習支援の場を作っていくという形で連携を図っているというお話だったのではないかと思います。

ちょっとまた村上さんにお話戻りますけれども、村上さんのこの就労支援のプロジェクトは、着実に就職につなげて成果を挙げていることで、働くということでの社会参加というのは、一つの自己実現の形であると思うんですが、それにはどうしても日本語の力が必要であるっていうことだったんですけども、そのあたり、参加者が今回のプロジェクトで強く意識されたというようなお話でしたよね、そのあたり、ちょっとお聞かせいただきたいんですが、

村上：

はい、このプロジェクトの主な参加者はフィリピンの方々でした。日本語学習が必要だったという理由も実

はそこいらへんが大きくて、これがもし中国の方が多ければ、漢字とか読むほうに関して、日本語はもっとなみなにされる部分があったかと思うんですが、フィリピンの方々に関しては、ガチ勝負で漢字と取り組まなければならないということでした。ですから日本語教室が関わったということなんですが、そうですね、まず初めは、不安感いっぱい、恥ずかしさいっぱいですね。二十年います、でも書けません、その反面、寡黙な中国人がスラスラとものを書いているのを見ると、やっぱりちょっと、ひく、というかね、そういうところが実は皆あったそうなんです。ただ、日本語の勉強は平仮名カタカナから始めるクラスも同時進行で自然発生的に必要に迫られてすることがあったんですが、それもやりながら、先輩にあたる方々は一生懸命漢字に取り組んだと。今の段階では介護に関する用語とか日常使うようなものに関しては、日々使っておりますので、ずいぶん慣れているかとは思いますが。

ただ、私自身はちょっと見てたので、思ったのが、6月の暑い時期から始まって、一番最終的には11月ぐらいまでお勉強ずっと見てましたけれども、書けない漢字や字がだいぶ減ってきたというところ、プラス、大した立派な字を書くようになったなという方が少なからずおりました。日本語で手書きでレポートあるいは実習の成果を書かなければいけない。これはパソコンではいけません、手書きでということでした。それを添削しながら、本当に見事な変身ぶりだになっていう方もいます。この方々、いまだに先生やってください、レポートの書き方わかりません、いつか勉強会開いてくださいという要望も出ておりますので、やればできるっていうことはわかりました。ただこれは皆さんに求めては間違いか。一部の初めて殻を破った方がそういうところに到達しただけであって、一様にフィリピン人の方々にこれを求めるのは無理かなと思います。ですから事業所も無理を言わずに柔軟にレポートやら報告書に関しては、外国人の国籍を見て柔軟に対応してくれる職員さんが何人かいてくれるといいのかな、と常々思っています。

大泉：

今の最後のお話に関連して、今回の場合は実際に就職をされた施設の方が、とても海外出身者の雇用に理解があったということをお伺いしていますが。

村上：

はい。一つの事業所、気仙沼市内にあるところなんですけど、そもそもがキリスト教を信仰されている理事長さんとか、外国というかキリスト教に関しては理解の深いところでした。たまたまそこにつながったところが大きかったと思います。その後は実習もここで一手に引き受けていただいておりますし、とても好意的に見てくださいますので。悪いことは言わない、言わないように努力をしているのかもしれませんが、「フィリピンの方々好かれていますよ」というような前向きなコメントが非常に多いのが嬉しいと思います。そうですね、ただ、ここだけではないんですよね、私が期待するのは、こういう事業所がリーダーの形をとって、市内の同じ事業所さんたちにいい影響を与えてほしい、口コミでもいいから、フィリピン人いいよって言ってもらえるような、そういう流れを作ってほしいと思っています。

大泉：

ありがとうございます。今のお話聞いていて思い出したんですけども、このまえ亘理の日本語教室にお邪魔した時に、所定の時間よりずいぶん早くに来て、大変難しい社会福祉士の資格をとりたいていうことで勉強されている方がいたんですけど、その方も施設で仕事されているということだったんですが、日本語能力は問題ないんですけども、なかなか実際にその方や他の方がヘルパーとして働きたいと思った時に、どうしても施設側が外国人ということで雇用を躊躇してしまうというような、そちらの教室の支援者の方のお話がありました。ですので、もしかしたら施設側にとっても、少し外国人の雇用についての意識を改めていくっていうことが必要なのかもしれないですね。気仙沼のこの取り組みが、そういったきっかけになってくれればな、と思います。ありがとうございます。

続いて清水さんのお話なんですけれども、清水さんと私たちがいろいろ実際に避難所を回ったり一人一人外国人について個別にサポートしていったということがありまして、そうしたケースをいろいろ重ねていて、私達が今回の震災でとても強く感じたのは、日本語教室というのが地域に暮らす外国人にとってのセーフティネット、何かあったときに支える、安心を提供する場であるということがすごくよくわかりました。

宮城県の場合は地域の外国人と一番つながりがあるのが日本語教室っていうことがあるんですけども、清水さんは今回のことを経験されて、特にそうことはあまり意識されていなかったでしょうかね。

清水：

全く意識はしておりませんでした。先ほど申し上げましたように、サポート体制を作っていわたけではございませんでね、やはり MIA の皆さんの姿、姿勢を見てやっぱり石巻地域だけでも自分たちでやらなきゃいけない、ということから支援活動に入ったということですね。ですからなんといいますか、避難所に収容されている方の情報については MIA のほうから入ってきまして、そこに行ってみると、だいたいの方は私どもに日本語教室でかつて学んだ人とかが多かったんですね、聞いてみると、やはりご家族亡くされたりだんなさん亡くされたりというようなことで、本当に一人ぼっちになってしまった、という人が何人かいたんです。そういう方々を中心ということで支援活動に入ったといいますか、支援をとにかくやらないといけないということで、始めたんですね。そういう経過でございました。

大泉：

ありがとうございました。金枝さん、清水さんのような方がいらしたら、とても心強いと思うんですけども、いかがでしょうか、清水さんの活動のお話を聞いて何か感想をぜひ。

佐藤：

そうですね。震災後、南三陸町の教室は全く機能できなくて、個人レベルの支援しかできないですけども、もし、清水さんのようなリーダーシップをとってくれる方がいらしたら、もっともっと地元の被災者にとって、もっと物ばかりではないですけども、安心感を与えられるのではないかと私はつくづく思いました。ありがとうございます。

大泉：

ありがとうございます。続いて、杉山さんの居場所作りについての話について、確認、また戻りたいんですけど、そのまま金枝さんにお話を聞きたいんですが、杉山さんが震災のあとに自分たちが集う場所、安心感を得られる場所としての居場所を作りたいというお話だったのですが、このあたりのことは金枝さんが日本語教室を再開したいと震災のあとに強く思ったということと重なる部分があると思うんですが、いかがでしょうか。

佐藤：

そうですね、もう町全体が座ってお茶を飲めるっていう場所がなくて、もし日本語教室だけでもいいかなっていう思いがありました。場所づくりなんですけれども、場所っていうのは、あくまでも一定したところと思ってたところがあったんですけども、例えば以前は公民館の一室を借りて、皆さんが集まってくれて、そこで、どうのこうので活動をするんですけども、今回は、移動して、皆さんが集まれる場所さえあればいいという、そのレベルが下がったっていうところがありました。本当に今も教室を探すだけでも大変だという状況ですけども。

大泉：

どうもありがとうございました。この、今のハッピーママの会のように、海外出身者が相互扶助のグループを立ち上げたっていうケースがけっこう実は宮城の場合はいくつかありまして、中華圏出身の方々が同舟会、同じ舟の会という相互扶助のネットワークを立ち上げたという動きですとか、それからフィリピンのグループもですね、複数ネットワークが立ち上がっています。気仙沼でもそういった動きがあったかと思うんですけども、ちょっと村上さんにそのあたりご紹介いただいてもよろしいでしょうか。

村上：

フィリピンの方々はそもそも横の繋がりが強かったんですね。南三陸町にいらっしゃる佐々木さん、アメ

リアさんっていうかなり有名人のフィリピン人の方なんですけど、彼女が中心となって後輩を指導する、面倒みる形でフィリピンの方々が大きくまとまってきました。ただ佐々木さんは南三陸町、気仙沼から多少の距離がありますので、気仙沼市内での活動っていうのはなかなかできなかったと思うんですね。彼女の後輩にあたる年代が30代40代になってきて、リーダーシップが取れるような人材が出てまいりました。ということで気仙沼には震災の以前からリーダーシップがとれるいわゆる世話役のような方を中心にフィリピンの方々はわりとまとまっていたと思います。まとまっているはいるに日本語教室には来ないというような傾向もありまして、それが震災があって、震災の一つのいいことというか、それをきっかけにフィリピン人たちがまた日本語教室に参加してくれるようになったという経緯がありました。

彼女たちはそれぞれいろんな名称などを付けながらグループがあつたんですが、一番最近では、気仙沼フィリピンコミュニティという形の名称のグループを作り、会の会長さん、副会長さん、規約なども作りまして、活動しているようです。主に介護活動をしているフィリピン人ですが、定期的に集まって、報告会、勉強会を開くというのが主な目的だそうですが、そのうちにはいろんな外国人が入れるような場にしたいということをリーダーさんはおっしゃっていました。

大泉：

ありがとうございます。フィリピンの方だけでなく、いろんな国出身の方が参加できるようなネットワークにしたいということですね。ありがとうございます。

ちょっとここで杉山さんのお配りいただいた資料にですね、一番最後に見逃せないことがあるんですけど、「今まで日本語教室で清水さんからいろいろなことを学びました。それをこれからの活動に生かしていきたいと思っています。清水さんありがとうございます」と清水さんへの感謝の念が綴られていますが、ここはぜひ清水さんにハッピーママの会についてのご感想をお伺いしたいところなんです。

清水：

すごく、大変素晴らしい会ではないかと感じています。石巻で日本語教室を開いて13年になりますが、杉山美恵さんも日本語検定一級を取られましてね、今は運営のほうにいろいろお手伝いいただいているわけですが、13年の間に私どもは、たとえば外国人児童生徒が小学校中学校に入られたときに、支援通訳をどうするかということがありまして、MIAのほうに市の教育委員会がいろいろ要請を図りまして、派遣してもらうという形だったんですね。

仙台の方々がなかなか石巻まで一時間以上かけて来るとするのは難しいということで、なかなか手配がつかない。だったら例えば杉山美恵さんをはじめ、いろいろな方々が日本語教室を卒業して、日本語検定1級・2級と取られていますし、来日の経験年数も深いわけですね。じゃあ、市の教育委員会のほうに、この人たちがお手伝いしてみてもどうなのかということで教育長とお話ししましてね、三年ぐらい前から取り上げてもらいまして、市の教育委員会が外国人児童生徒の支援制度を作ったと。その支援制度の中身は全部MIAから情報提供をいただいて作つたらしいんですけど、現在6ヶ国語で17名ほど、私どもの卒業生あるいは現役の学習者が登録させてもらっています。

それから、石巻市のほうに外国人相談窓口っていうのがありましてね、そこに従来ですと留学生が一人対応しておったんですが、やはり、外国人のお嫁さん方が多い地域ですから、少なくとも中国語と韓国語とそれから英語ですね、これにフィリピンの方が多いですから、タガログ語、こういった言葉が話せる人が相談員としていたほうがいいんじゃないかということで、これについても、市のほうにいろいろお話ししましてですね、現在二年目なんですけれども、中国語、韓国語、それから英語プラスタガログ語という4ヶ国語3名の人が臨時職員として市のほうに採用いただいて、今、頑張っているわけですね。

こういう人たちがよほどつながりとか、私たちで対応しきれない部分があるわけですが、そういったことで、国は別々ですけど皆仲良くなりまして、いろんなことを企画してやっていく、これこそ住みやすい地域づくりって言いますかね、外国人の皆さんにとって、そういったものにつながっていくんじゃないのかな、ということで、私どもは積極的に支援あるいは一緒に行動していきたいというふうに思っております。私たち、ここ数年逆に杉山さんがたからいろいろ肩を押してもらって動いている状況です。非常に頼もしい人です。ということでこれからも支援をしていきたいと思っています。以上です。

大泉：

ありがとうございました。もともと日本語教室で学ばれていた方々が、そこで力やつながりを得て、自分たちで立ちあがって活動を始めていくという、日本語教室のあるべき目標の一つかなあ、という印象を持ちました。ありがとうございました。ぜひ、ハッピーママの会にこれからも友好21としても応援をしていただければと思います。

続いて、金枝さんのお話についてなんですけれども、村上さんにここはぜひ、今年再開した南三陸町の日本語教室、お隣さんとして何かアドバイスとかありましたら、お願いしたいのですが。

村上：

実は南三陸町の日本語教室で先生をされている方、私よく存じ上げておりまして、月に一度、気仙沼市役所にいらっしゃると私の隣に一日お座りなってますね、いろんな情報交換をするんですけども、日本語教室が始まるっていう話をその方から聞いてまして、実はよく聞いております。彼女の悩みも聞きましたし、こんな状態なんだよということも聞きました。

まず、中国の研修生の方々が来てくれるっていうのを聞いてびっくりして、気仙沼市の事業所さんで研修生に日本語を勉強していいっていう、ちょっと言いかねるような状況というか、そういう例がかつてなかったものですから、「すごく素晴らしいですね」ということを言いましたら、「そうなの？」って逆に言われるのね。だから、ああそうか、皆さんよく状況とかご存じなくて教えていらっしゃる方もいるなということで、もしかしたら日本語の先生の方々も、とまどって外国の方々の状況を知らないでいらっしゃる方もいるんじゃないかと思います。そういうことで、彼らの生活形態なんか、特徴なんかを教えてあげるっていうのもいいことかもしれませんよね。ときどきフィリピンの方のカトリックのお話とか、中国には選挙がないなんていう話までしなきゃいけないくて、そういうあたりの外国人のバックグラウンドみたいなことも、ボランティアの方々は多少ご存知のほうがいいかなということがあります。

あと、やはり日本語をすごく難しいものとして考えているような印象を受けます、その方から聞くと。金枝さんがすごく素晴らしいというのは私もよく知っていますけども、「台湾から来た方のほうが私よりも上手だったりして、なんて」そういう笑えない冗談まで出て、「そんなことないです」といつも否定しているんですけども、ちょっとやっぱり、きちんとした日本語の教育というのは必要ないかもしれませんが、ある程度の自信と経験ですね、あと、とっかかりが何かあったほうが、ボランティアの方も、いわゆるブレイクスルーみたいなのがあったほうがいいな、と思います。ある瞬間、彼女は「私にもできるわって思った」とって言ったことがありましたよ。「これからもやっていけると思います」とって最後おっしゃっていましたので。そういう感じですかね。

大泉：

ありがとうございました。金枝さん何か今の村上さんのアドバイスに対してありますか

佐藤：

実は、自分から見た目と周りからのアドバイスというのは初めてですので、ありがとうございます。すごく参考に、重要なアドバイスをいただいて、ありがとうございます。

大泉：

ありがとうございます。お隣の地域ですし、これからもいろいろな形で連携を図っていただければなと思いました。

ということで、すいません、進行が拙くて残り5分となってしまいました。皆さんからの質問をお受けする時間がなくなってしまいました。が、今日の午後の部ですね、こちらの四名の皆さん、引き続きいらっしゃいますので、今日のお話についてさらにお聞きになりたいということがありましたら、休憩時間とか午後の時間とかをご利用いただいて、お話をさせていただければと思います。

最後にもう一度四人のお話を振り返りたいと思うんですが、まず村上さんからは外部の支援団体と積極的

につながって連携を図ることで就労支援という分野で大きな成果を上げたというお話でした。これは地域の日本語教室のこれからの可能性をですね、新しい可能性を感じさせるお話ではなかったかな、と思っています。清水さんからは、震災の直後から学習者の安否確認ですとか個別の支援に奮闘されたという話がありました。これは日本語教室が地域に暮らす人たちの安全網、セーフティネットになっているということをもぎまぎと感じさせることではなかったかと思います。杉山さんについては、かつては日本語教室で日本語を学ぶ側、いわば支援される側でいらしたんですけども、震災をきっかけとして自分たちで居場所づくりをしたということで、そういうふうになり上がったということで、その居場所というの、新たなつながりを得たい、それからつながりを確認したりするという場所になっているのかな、という印象を持ちました。そして、金枝さんからは、震災を経験して、日本語教室の役割について改めて認識を深めて教室の再建に取り組まれたというお話をいただきました。四人の方々から大変貴重なお話を伺いました。

最後に皆さんから一言ずつ今日のパネルセッションを振り返っての感想と今後ですね、こういったことに取り組んできたいというようなお話をいただければと思います。すみません村上さんから。

村上：

今日の会に来た目的の一つが、難民支援協会という素晴らしい団体の援助があったことを皆さんに広くお伝えするということですね。固有名詞として覚えていただきたいということと、あと言い忘れました、日本語教室をしていくうえで、気仙沼市にある「日本語教室はまろう会」という日本語教室を活動している団体、グループがあります。この方々について一言も述べてなかったのが、大変申し訳ありませんでした。日本語教室のメンバーは、はまろう会のメンバーです。私一人が市役所から参りまして、今二人ですけれども、先生方はみなさん、はまろう会の先生方なんですね。ですから、この方々の力があって初めての教室であるということも皆さんに周知するのも目的でした。すいません、この二つの固有名詞を覚えてお帰りください。

これからしたいことはですね。外国人への日本語教育の実施だけじゃなくて、日本人への外国人理解の実施ですね。もう少し外国人への理解を深めていただかないと、というところがあります。それが一番大きな課題ではないかと思っています。

大泉：

ありがとうございます。続いて清水さん。

清水：

気仙沼の村上さんの就労支援のお話、大変参考になりました。石巻の場合につきましては、震災後、日本語教室を辞めていく方が多くなりましたし、それからパートとか仕事探しに入っていくというふうな状況がずっと続いているんですね、それに対して私どもは、対応と言いますか支援がうまいことってないという現実がありますので、今後そういった問題にも取り組んでいきたいというふうに考えております。

それから、震災後、他の地域の皆さんも同じかと思いますが、旦那さんが仕事を失ってしまっただけで、結局それが問題で離婚に結び付くというようなケースが何件が出ておまして、結局私どもで対応しきれないところがありまして、行政書士の先生とか、市民相談センターに行つての相談とか、いろいろ相談しながら、場合によっては弁護士の方にお会いして相談するというところで今対応しておりますけれども、そういったものについては、私どもちょっとなかなか難しい問題がありますので、公的な機関と少し相談をしながら、これから取り組んでいきたいと考えております。

それから、皆さんからいろいろお話をいただきましたが、石巻市でようやく多文化共生推進プランというのを作ろうということで、委員会ができてスタートしたわけでございますね。MIAの大村さんとか、今日ご出席のモリス先生にもいろいろお手伝いいただいて、プラン作りに入るわけでございますが、その中でも出来るだけ外国人の皆さんが支援をしていけるようなもの、あるいは外国出身の皆さんにとって住みやすい地域づくりって言いますか、そういったことを模索しながら取り組んでいきたいなと、いうふうに考えております。以上です。

大泉：

ありがとうございます。杉山さんお願いします。

杉山：

今日はここに座って大変場違いって思っています。ハッピーママの会が立ちあがって何をしたいっていう漠然としたものしかなくて、一年経ってから少しずつ見えてくるものもあって、やっぱりまだちゃんとしていなくてというのはこの場ではっきり自覚しましたので、これから運営していくのに何が必要か、何かしなきゃならないものが少しずつ見えてくるんだと思います。ぜひ皆さんの力とアドバイスをもらいたいと思っています。ありがとうございます。

大泉：

ありがとうございます。ハッピーママの会について、きちんと紹介されたのって、たぶん今日が初めてですね。

杉山：

はい、そうです。

大泉：

今日いらっしゃる方々、ぜひいろいろアドバイスとかしていただければと思います。たぶん皆さんいろいろ力になってくれると思います。頑張ってください。ありがとうございました。

杉山：

お願いします。

大泉：

最後、金枝さんお願いします。

佐藤：

感想なんですけども、さまざまな形で外国人に対する支援・応援ということを、近いようで遠い町から話を聞いたのは初めてだし、これからもっと情報交換をしていきたいと思いました。これからなんですけども、南三陸町の教室はまだ模索状態であるんですけども、自分の色を出しながら、個性を出しながら。継続するのが大事だっていうことを大泉さんは前も言ってくれて、継続していくっていう希望を出して、もっとボランティアの講師を増やしたいという希望をしたいと思っています。ありがとうございます。

大泉：

ぜひ頑張ってください。どうもありがとうございました。ということで今日、4人の話を聞いてきましたけれども、フロアでお聞きになっている皆さんも、日本語教室の役割ですとか、つながりについていろいろお感じになること、参考になることあったかと思います。大変貴重なお話をしてくださった4名の方に拍手をして感謝の意を表したいと思っています。皆さん本当にありがとうございました。では、午前中の部を以上で閉じたいと思います。みなさん、ご協力ありがとうございました。

